

番号	位置	層位	分類	器種	形状	土質	表面調整	内面調整	備考	整理
1	L-33	Ⅱ層	Ⅱ-B	深鉢	口縁	硬地	文(多色)→口縁十字(白)			9
2	L-35	Ⅱ層	Ⅱ-B	深鉢	口縁	硬地	文(多色)→口縁十字(白)	十字		13
3	J-39	Ⅱ層	Ⅱ-B	深鉢	胴	織織・砂粒	文(褐色)→十字			5
4	J-38	Ⅱ層	Ⅱ-C	深鉢	口縁	織織・砂粒	口縁彫刻目, 口縁部貼附ヨリ, 胴部L字線文様付	十字		37
5	K-37	Ⅱ層	Ⅱ-C	深鉢	胴	織織・砂粒	口縁多色L字線L字線, 胴部L字線文様	十字		6
6	T-62	Ⅱ層	Ⅱ-D	深鉢	胴	織織・砂粒	木目状彫刻多色			48
7	Q-47	Ⅱ層	Ⅱ-D	深鉢	胴	織織・砂粒	木目状彫刻多色	十字		21
8	T-78	Ⅱ層	Ⅱ-D	深鉢	胴	織織・砂粒	木目状彫刻多色			39
9	T-51	Ⅱ層	Ⅱ-D	深鉢	胴	織織・砂粒	木目状彫刻多色			32
10	S-47	Ⅱ層	Ⅱ-B	深鉢	口縁	硬地	十字			38
11	T-62	Ⅱ層	Ⅱ-B	深鉢	胴	硬地	ループ状			49
12	Q-65	Ⅱ層	Ⅱ-A	深鉢	穴部					K13
13	S-58	Ⅱ層	Ⅱ-A	深鉢	胴(口)					K14

第10図 遺構外出土土器(2)

第IV群土器 縄文時代後期の土器

A類 弥栄平式に比定される土器 (10-12・13、11-1)

10-12は口縁に5つの三角形突起を巡らす。10-13は縄文施文後、沈線で区画し縄文を磨消している。11-2は壺の口縁部片である。頸部が直立する器形である。文様は5条1単位のハケ目状工具で横位・縦位に施文し、交差した部分に浅い沈線で丸く施文する。また、工具痕の間をなぞるように沈線が施される。

B類 十腰内I式に比定される土器 (11-2~8)

すべて沈線文のみで文様を構成する。横位の沈線 (11-2・6)、入り組み状文 (11-3~5)、菱形文 (11-7・8) 11-2は浅鉢の口縁部片である。器形は、折り返し口縁直下と頸部で強く屈曲する。断面は非常に薄い。文様は横位に沈線を巡らす。11-4は沈線により入り組み状文を構成する。その後器面全体を磨いている。11-4・5は壺の胴部片である。2条1単位の入り組み状文を構成する。6は壺の胴部片である。浅い沈線が横位に施され、器面全体も磨かれる。胎土は石英を多く含み、焼成も良好である。10-7・8は沈線を菱形に施す土器である。器面を横位にナデ調整した後、沈線が施される。10-7は無文部分と菱形文との区画に沈線が横位に施される。10-8は左下 (右上) 方向に沈線が施された後、左上 (右下) 方向に沈線をつける。胎土は雲母の混入が見られる。

C類 十腰内II式に比定される土器 (11-9~12) 11-9・10・11は口縁部片の同一個体である。

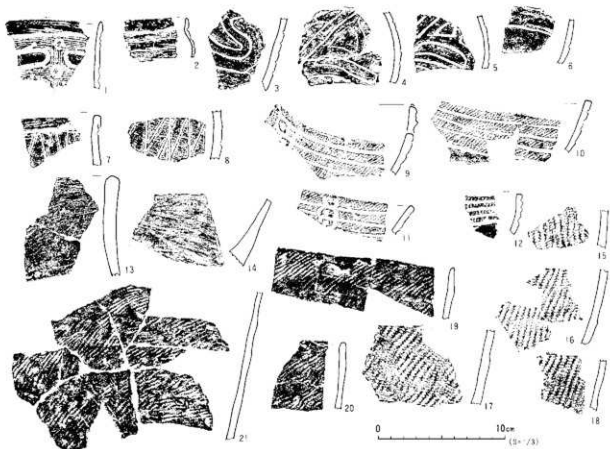
波状口縁であり、口縁付近がやや内湾する器形である。口唇部は平坦に面取りしている。文様はLR縄文を横位に施文し、器形に平行して4条の沈線を巡らす。縄文は密で非常に細かい。波頂部直下等にS字状沈線を縦位に施した後、管状工具で刺突文をつける。波状部の口唇には内外面にまたがせて刻みをつける。内面調整は、横位に丁寧なミガキを施す。11-12は浅鉢の口縁部片である。LRの縄文を口縁部付近に施文した後、横位の沈線を4条施す。縄文は密で非常に細かい。

D類 後期に相当する土器 (11-13~21)

1 無文土器 11-14・15は無文土器の一群である。共に横方向のケズリ、ヘラミガキが見られる。11-14はほぼ直立するような器形で、口唇部は面取りして平坦である。口縁付近にススが附着する。11-15は底部付近の破片で横方向のケズリ・ナデが見られる。胎土は砂粒・雲母が多量混入する。

2 縄文のみ施文された土器。11-18・17・19・16は胴部片でRL縄文が横位に施文されている。条と条の間隔が広く、ある程度器面が乾燥した段階で縄文を施文したと思われる。胎土は砂粒・雲母を多く含む。11-20・21・22は同一個体である。口縁はわずかに内湾する器形である。LR縄文を口縁から胴部にかけて横位に施文し、口唇部は縄文施文後に粘土を使って、再度成形している。口唇は面取りして平坦である。内面調整は横方向のミガキを施す。

(坂本 真弓)



番号	位置	層位	形状	器種	部位	胎土	外面装飾	土質調整	備考	整理
1	Q-50	Ⅲ層	A-B	深鉢	口縁		横線文・波線文(図11)	土質調整		25
2	X-42	Ⅲ層	A-B	深鉢	口縁		斜り波し山線			15
3	R-44	Ⅲ層	A-B	深鉢	胴	織物	波線	十字		34
4	Z-38	Ⅲ層	A-B	深鉢	胴		波線→三方巾			2
5	Z-38	Ⅲ層	A-B	深鉢	胴		波線→三方巾			3
6	Z-38	Ⅲ層	A-B	深鉢	胴		波線→三方巾			4
7	R-11	Ⅱ層	C-B	深鉢	口縁		斜り波し山線、口縁部下に平行波線		図11-9と同一	29
8	S-45	Ⅲ層	B-C	深鉢	胴		波線波線		図11-6と同一	53
9	L-42	Ⅲ層	B-C	深鉢	口縁		上波線・平行波線4条	十字		13
10	L-42	Ⅲ層	B-C	深鉢	口縁		上波線・平行波線4条、口縁部波り	三方巾		12
11	L-42	Ⅲ層	B-C	深鉢	口縁		上波線・平行波線4条	三方巾		14
12	R-70	Ⅲ層	B-C	深鉢	口縁		上波線・波文・平行波線4条、口縁部波り	十字		38
13	R-10	Ⅲ層	D2	深鉢	口縁	粉砂・石灰・炭	ヘラ上磨き(3カ)、口縁波り	十字		56
14	Q-17	Ⅲ層	B-D2	深鉢	胴～底	石灰質粘土	三方巾(口)			22
15	R-41	Ⅲ層	B-D2	深鉢	胴	白色粉砂・石灰	文・波文・十字			30
16	R-42	Ⅲ層	B-D2	深鉢	胴	白色粉砂・石灰	文・横波四角波文			32
17	R-41	Ⅲ層	D2	深鉢	胴	白色粉砂・石灰	文・横波→十字			27
18	R-41	Ⅲ層	B-D2	深鉢	胴	白色粉砂・石灰	文・横波四角波文	三方巾		3
19	M-30	Ⅲ層	B-D2	深鉢	口縁		上波線→口縁部半波に平行	十字		81
20	M-60	Ⅲ層	B-D2	深鉢	口縁		上波線→口縁部半波に平行	十字		83
21	M-60	Ⅲ層	B-D2	深鉢	胴		上波線四角波文	十字		85

第11図 遺構外出土器(3)

第2節 石器 (第12図～第13図)

石器類は全て遺構外からの出土で、総数49点ある。これらを素材・形態・使用痕跡から器種ごとに分けた。器種は、石鏃・石槍・石匙・スクレイパー・剥片・敲石・磨石・礮器・砥石・硯などがある。このうち、剥片27点は報告書に掲載しなかった。以下に、器種別に石器の特徴を述べていく。

石鏃 (12-2・3) 2点出土した。いずれも石質は珪質頁岩である。2点とも無茎鏃に大別され、さらに基部の作出法方により細分される。

2は、基部が直線的な平基無茎鏃である。尖頭部は欠損しており、欠損部は被熱によりハジケとんだ印象を受ける。3は基部に抉りのある凹基無茎鏃である。

石槍 (12-1) 1点の出土で、石質は珪質頁岩である。尖頭部に欠損がみられる。両面調整で丁寧な押圧剥離により整形される。器形は大形な木の葉型である。

石匙 (12-4・5) 2点出土した。いずれも石質は珪質頁岩である。

形状によりさらに細分される。4は横型の石匙である。刃部は急角度な剥離調整をいれて作出している。5は幅広な縦型の石匙である。背面のみの片面調整で、丁寧な押圧剥離を施し刃部を作出する。腹面には、連続する微細剥離痕を持つ。つまみは長軸上からずれたところに作出され、バルブは除去されている。

削器・掻器類 (12-6～15) 10点出土した。石質は全て珪質頁岩である。刃部の作出方法により、細分される。

I類 両面の周縁部に剥離調整が施されるもの (6～11)

II類 側縁部に、極浅形剥離が施されているもの (12)

III類 側縁及び端部に、使用による刃こぼれ状の微細剥離が認められるもの (13, 14)

6は両面に丁寧な押圧剥離を施し整形される。側縁に連続する微細剥離痕を持つ。7は長軸上の下端部に急角度な調整を施し刃部を作出しており、掻器的なものと思われる。刃部の縁辺には微細剥離痕がみられる。9は末端がヒンジフラクチャーになる縦長の剥片を素材とし、その側縁に刃部調整が施される。

礮器 (13-1) 1点の出土で、石質は頁岩である。

素材の一端を打ち欠いて刃部を作出したものである。刃部付近には、わずかに擦痕も認められる。両側縁には剥離痕と敲打痕がみられる。

磨石 (13-2～4) 3点の出土で、石質は全て安山岩である。

使用痕跡により細分されるが、本遺跡で出土しているのは、I類とIII類である。

I類 自然礮の側縁及び稜に、磨面を持つもの。(2, 3)

II類 自然礮の器面に磨り面を持つもの

III類 自然礮の器面に磨面と敲打痕を持つ、複合機能のあるもの。(4)

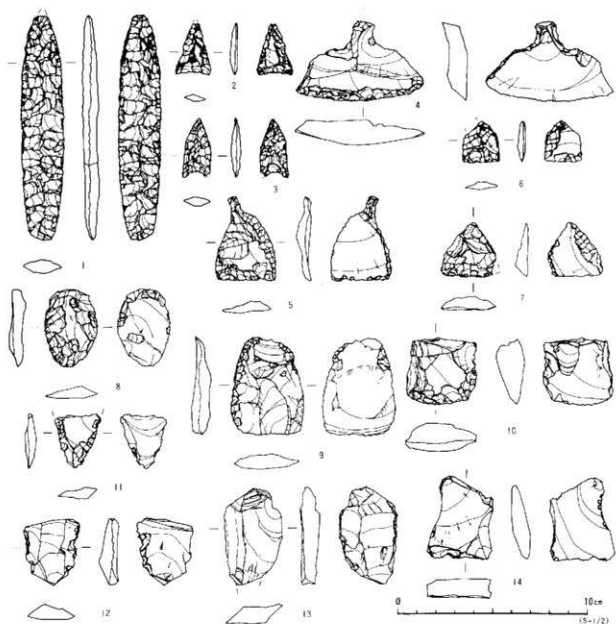
I類は2点ともに、機能面を持つ側縁が直線的になる。機能面は、幅狭で、平坦であり、両縁に剥離を持つ。剥離のバルブは磨面により切られているものが多い。III類の4は側縁から端部にまでおよぶ磨面を持つ。磨面の形状は幅広で、緩やかな凸状になる。器面の片面に凹み・浅い敲打痕を持つ。

敲石 (13-5) 1点出土した。石質はチャートである。

砥石 (13-6) 遺構外から1点の出土である。石質は細粒凝灰岩である。

硯欠損品 (13-7) 1点出土した。石質は粘板岩である。

(小山 浩平)



番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	備考
1	S-44	IV	石槍	119	23	9	23.1	埴貫頁岩	
2	R-41	V	石鏃Ⅱ	(27)	19	4	1.3	埴貫頁岩	
3	T-56	V	石鏃Ⅱ	32	(15)	5	1.8	埴貫頁岩	
4	Z-74	攪乱	石鏃Ⅱ	43	67	13	26.2	埴貫頁岩	
5	R-45	V	石鏃Ⅰ	45	32	8	7.0	埴貫頁岩	
6	O-42	IV	削器・棒器Ⅰ	(22)	20	4	1.6	埴貫頁岩	
7	T-45	IV	削器・棒器Ⅰ	29	(29)	7	4.2	埴貫頁岩	
8	K-37	Ⅱ	削器・棒器Ⅰ	41	28	9	9.0	埴貫頁岩	
9	P-41	IV	削器・棒器Ⅰ	51	38	9	9.8	埴貫頁岩	
10	K-37	Ⅱ	削器・棒器Ⅰ	34	37	15	17.5	埴貫頁岩	
11	K-37	Ⅱ	削器・棒器Ⅰ	(28)	25	6	2.8	埴貫頁岩	
12	L-38	Ⅱ	削器・棒器Ⅱ	35	30	10	9.6	埴貫頁岩	
13	K-37	Ⅱ	削器・棒器Ⅲ	51	30	10	14.2	埴貫頁岩	
14	S-44	IV	削器・棒器Ⅲ	43	(35)	10	13.1	埴貫頁岩	

第12図 遺構外出土石器(1)



番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	備考
1	S-42	V	燧石	127	61	25	268.9	安山岩	S-1
2	S-47	IV	燧石 I	150	80	45	696.5	安山岩	
3	Q-42	V	燧石 I	(121)	65	39	433.9	安山岩	
4	P-50	V	燧石	116	59	45	389.8	安山岩	
5	T-70	III	燧石 I	(130)	(95)	51	638.5	チャート	
6	T-50	IV	燧石	133	71	43	375.5	細粒凝灰岩	S-1
7	Z-74	III	板	121	(48)	13	70.4	粘板岩	

第13図 遺構外出土石器(2)

第3章 まとめ

本調査で検出した遺構は、土坑23基、竪穴遺構1基、焼土3基、道跡1条である。出土遺物は、縄文時代早期中葉から縄文時代後期の土器と石器などが出土した。以下にこれらの遺構と遺物について簡単なまとめを行う。

検出した土坑を形態別にみると、溝状土坑が20基、フラスコ状土坑が1基、円筒形土坑が2基に分けられる。以下に溝状土坑と円筒形土坑について記述する。

溝状土坑は、狩猟用の落とし穴であったものと考えられ、調査区南側の沢に面した平坦地のグリッドライン40～50に集中してつくられているものと、調査区北側の斜面部につくられているものに分けることができる。規模的には、ほぼ同一で長軸で3.5mから4mほどである。深さは最大2mから1mほどでバラツキがあるが、南側平坦面は地形を改変されているため削土されているものが多いものと判断している。南側平坦部につくられている15基の長軸方向は、主にN-60°-EからN-110°-Eの範囲で、東西方向に主軸を於いてつくられている。これは、調査区北側の斜面地で検出されたものとはほぼ同じ軸方向で、斜面地の溝状土坑との関連性があるものと考えられる。他の遺跡検出の溝状土坑の構築要因をみると、一つの特性として、斜面に平行してつくられる傾向がある。本遺跡の溝状土坑でも、前述のように傾斜地のものは、斜面に平行してつくられており、追い込むという狩猟方法を考えた場合に、南側平坦部も全体的な地形からしてみれば、斜面から下り傾斜が集約する部分でもあることから、溝状土坑が集中してつくられたものではないだろうか。南側平坦部の溝状土坑の中には、地震によってズレているものとズレていないものがあることから、すべての溝状土坑が同一時期に機能していたとは考えられないが、構築するうえでの基本的な考えは共通していたように思われる。溝状土坑の構築機能時期は、明確にできないが、第17号土坑堆積土から出土した遺物から、縄文時代後期前葉以前であった可能性がある。

溝状土坑以外に落とし穴として機能したと思われるものに、第V層の中振浮石層下層面で検出した円筒形土坑がある。円筒形土坑は、いずれも円形で小穴を有している。第2編寺山(3)遺跡の斜面に検出された土坑群とほぼ同じで、落とし穴として機能したものと考えられる。時期は、検出層位から縄文時代前期前葉以前と思われる。

また、中振浮石層下層面から検出された焼土は、周辺から柱など検出されないことから、住居に伴うものとは考えられない。焼土の周辺から縄文時代前期初頭の土器片が出土していることと、落とし穴の検出から、該期にキャンプサイトとして利用した痕跡の可能性はある。

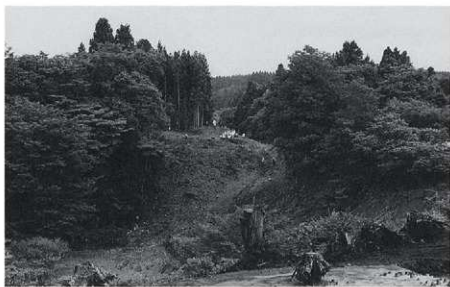
出土遺物は、縄文時代早期から後期にかけての縄文土器が839点、石器49点が出土した。このうち、主体をしめるのは縄文時代前期初頭と縄文時代後期である。縄文時代早期の土器は胴部に貝殻押し引き文を施文する土器で縄文時代早期中葉の吹切沢式に相当する。縄文時代前期初頭の土器群は0段多条の単節縄文を多方向に回転施文するものが多い。縄文時代中期の土器は大木8a式土器で1点出土した。縄文時代後期の土器は十腰内I式に比定されるもので、単節縄文を横位に回転するものが多くみられた。

以上、本調査区の平塚(2)遺跡は、落とし穴を構築するような縄文時代の狩猟域としての土地利用が行われていた。調査区周辺の沢地に面した地域には落とし穴群が続いている可能性がある。

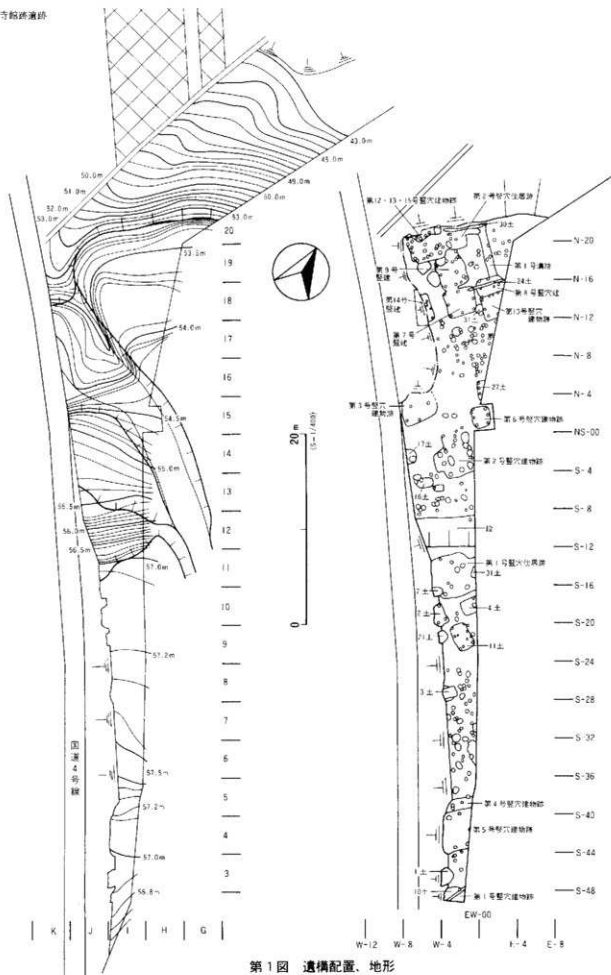
(坂本真弓)

第5編 伝法寺館跡

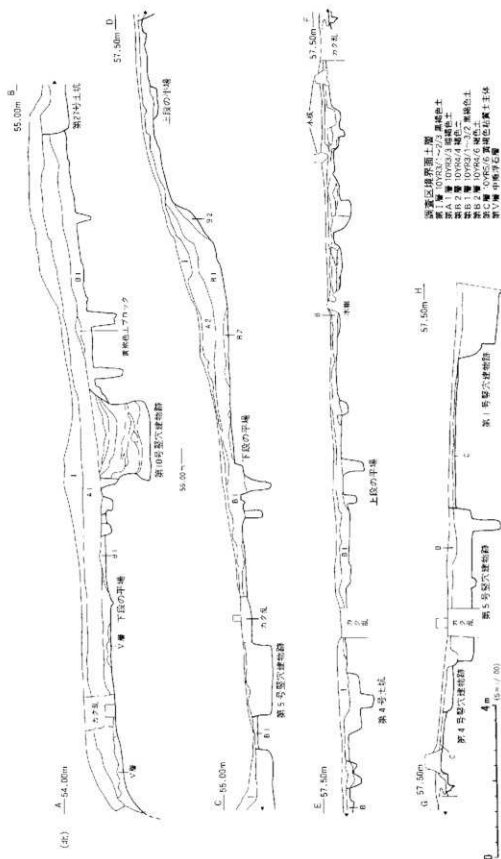
第5編



館跡現況(北から)



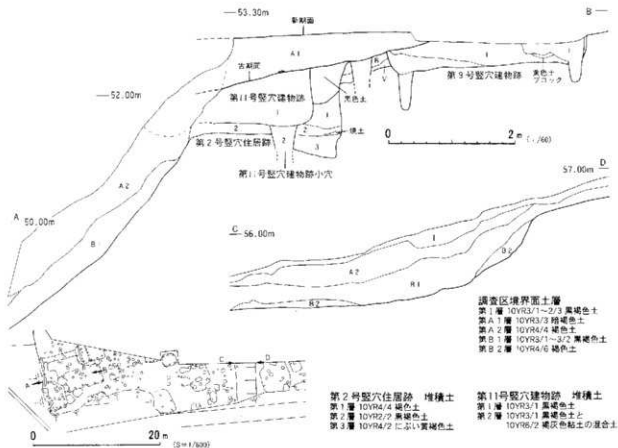
第1図 遺構配置、地形



調査区境界面土層

第1層 0VR37-2/3 黒砂土
 第2層 0092/4 黒砂土
 第A層 0092/4 黒砂土
 第B1層 0093/1-3/2 黒砂土
 第B2層 0094/6 黒砂土
 第C層 0095/6 黒砂土
 第IV層 中層子石層

第2図 調査区内土層(1)



第3図 調査区内土層(2)

第1章 基本土層 (第2図、第3図)

調査区内の地層については、基本的に平窪(1)遺跡と平窪(2)遺跡と同じであるが、館跡という遺跡の特性から大きく改変している。後述する上段の平場部分では、第1層の表土以下が、第3編に記載した第X層ないしは第XI層となっている部分も多く、下段の平場では第V層の中撒浮石が部分的にみられるが、大部分は第VI層ないしは第VII層の基盤層面となっており、第II層から第IV層の自然堆積層は欠層している。第2図に調査区東側境界面の土層を示したように、第I層の表土層は、近現代の攪乱が激しく、第I層以下の層については、黒褐色土や灰黄褐色粘質土にローム粒や細ブロック、焼土粒、炭化物粒が混入する。全体的に層厚はなく、土色や混入物なども漸移しているため、明確に分層できない。そのため、遺構の堆積土であるのか館造成、改築の際の整地層および盛土であるのか判別できなかった。特に、同図土層E-Fライン南側(上段の平場)では小穴や焼土痕が混在し、不明確な部分が多い。この遺構が密につくられている部分の土層は、黄褐色土が主体であり第C層とした。この第C層の上層の第B1層は、段差を埋めるように厚く盛られており、この層中より、第・図・の白磁のほか陶磁器類が多数出土していることから、館機能時の埋土と考えている。この上位層の第A層中からも陶磁器類の出土が多いほか、第A層の上面で遺構を検出していることから、館改築時の整地土であるものと考えている。

第2章 検出遺構と遺物

概要

本館跡は、平窪(1)遺跡の南側の丘陵地に立地しており、遺跡とは幅約70m、比高差約15m程の沢によって隔てられている。館跡の規模と構成は、『青森県の中世城館』によると、「舌状に張り出す丘陵を堀切により区画した、東西二つの郭により構成される。東郭の規模は、東西約100m、南北約90m、西郭は、東西約60m、南北約100mあり、郭を分ける堀は幅約30m、深さ3m程の二重堀である。」館跡の起源については不明であり、館主については、『館持御支配帳』に「伝法寺館四百石、津村伝右衛門」とあり、津村氏の居館とされているが、詳細については不明である。

本館跡の構造と機能等については、後述の「伝法寺館跡の縄張りについて」で述べられている。

本調査区は、東郭内に通された国道4号線の脇にあたる。館跡北側の斜面と国道の法面部分を含めた狭長な範囲である。調査区内の標高は約52m～57mで中央部分に段差が作られている。

調査により、館跡には新期・古期の二時期の画期があり、新期には斜面を大規模に改変している。検出遺構は、掘立柱建物跡3棟・掘立柱建物跡に関連する小穴(柱穴)213個・竪穴建物跡16棟・竪穴住居跡2軒・溝跡1条・土坑34基・焼土範囲22箇所である。遺構は調査区内に重複しており、大半のものが館機能時に作られたものである。ほかに、縄文時代と平安時代、近世に比定されるものもある。

これらの遺構を調査時には略号で呼称し検出順に番号を付したが、精査段階で遺構と認定されないものについては欠番とした。欠番はSK-19とSK-23である。また、SI-5とSI-9は精査および整理段階で遺構名を変更した。

出土遺物は、陶磁器類、鉄製品のほかこれらと混在して土師器も相当数出土しているが、細片が多い。また、国道4号線建設の際に鉄製の甲が出土しており、十和田市郷土館に保管されているが詳細は不明である。

第1節 削平地・段・斜面 (第1図、第3図)

削平地・段：本調査区には現況で、第1図の地形図に示したように、12グリッドのS-12ラインを境に急傾斜になっている部分があった。表土面からの攪乱も目立ち、当初は国道建設の際の影響と思われた。調査により、表土直下の暗褐色土、第A層面は北側斜面縁辺まで続いており、壁面の第A層面から遺構の掘り込みが確認されたことから、館跡構築時に造成されたものであることが判明した。段差は緩傾斜で比高差は約1.5mあり、この段を境に、上段の平場と下段の平場に分けられる。館内を区画するためのものと考えている。

下段の平場は、段直下の面から緩やかに傾斜しながら北側縁辺まで延びている。第3図の土層A-Bに示したように、館跡に二時期の画期があったものと判断している。第4図に示したように、多数の焼土跡と柱穴と考えられる小穴が検出された面は、館跡の最終機能時期(新期面)と考えられ、前段階(古期面)の遺構を埋め戻して作られている。この古期面についても土質から整地盛土層と判断され、段差が自然地形の状態と考え難いことから、古期の段階にも基盤層面で機能していた時期と第B1層上面で機能していた時期があったものと考えられる。

上段の平場にも、新・古、二時期ないしは三時期の機能時期があったと思われるが、表土直下が基

盤層面で遺構が混在しているため明確に捉えることができなかった。

斜面：ここでいう斜面とは、調査区北端部の斜面である。館跡の外まわりを形成するもので、自然地形を利用して造成されているものと推測された。斜面縁辺部の古期面には竪穴建物跡群があり、この遺構群とそれ以前の遺構である平安時代に比定される住居跡は、斜面上に削られていることから、新期面造成の際に大規模な地形改変が行われたものと考えている。

第2節 掘立柱建物跡

前述の段を境に区画された上段の平場と下段の平場からは、柱穴として機能したと思われる小穴が総数 213個検出された。大多数の小穴は、掘立柱建物、櫓のような構造物であったと考えられるが、小穴規模のバラツキと間隔や並びのバラツキが多く復元できたものは3棟だけである。

第1号掘立柱建物跡 (第4図)

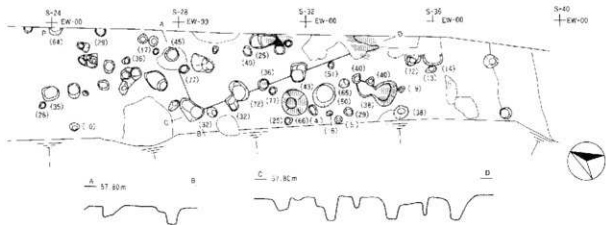
〔位置〕調査区上段の平場 I-6・7グリッドに位置する。〔重複〕第18号土坑および他の小穴と重複するが新旧は不明である。〔規模〕調査区外へ延びるため詳細は不明だが、検出した部分で2間3間以上の掘立柱建物跡と考えられる。〔柱穴〕柱穴の規模は20cm～最大60cmで、深さは概ね80cmにまとまる。上部形状が不整形になるものが多く抜き取られている可能性がある。〔柱間寸法〕P1とP2間が2.1m、P2とP3、P4とP5間は2mである。P3とP4間が1.5mあり、平均寸法は約1.6mである。〔年代〕新期・古期いずれの時期に属するか明確でないが、館機能時のものと思われる。

第2号掘立柱建物跡 (第4図)

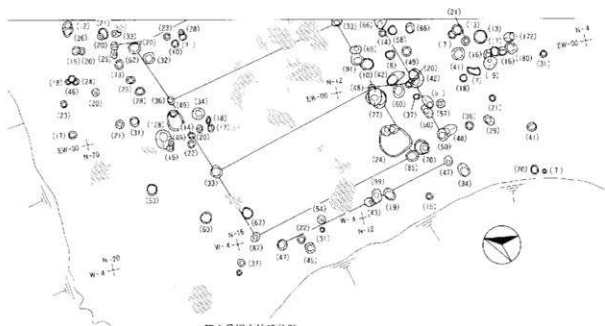
〔位置〕調査区北側下段の平場 I・H-18・19グリッドに位置する。新期面の焼土を囲むようにある。〔規模〕調査区外へ延びるため詳細は不明であるが、P1からP8で構成される、おそらく3間2間の掘立柱建物跡と考えられる。〔柱穴〕柱穴の規模は20cm～50cmである。深さはバラツキがありP1～P5は70cm～90cm前後、P6とP7は約35cm、P8は60cmである。〔柱間寸法〕P1～P8までの各柱間寸法は約2m強である。P7とP8間が2.2mとやや短い平均寸法は2.4mである。P1と対するP7までの柱間寸法は5.8m、P4とP5間は5.5mである。〔その他〕本遺構の周囲には同一レベルで多数の小穴が存在する。新旧関係が不明なものが多いが、おそらく作り替えが頻繁に行われていたものと思われる。これらの中から、本建物跡に付随する可能性のある柱列がある。P9～P14で構成されるもので、建物跡と近接してあるが櫓の可能性もある。小穴の規模は約20cm程で、南側のP9～P11の深さは50cm～60cmである。西側のP12～P14は深さ40cm前後にまとまりを見せる。各柱間隔はP9～P11間が各2.1m、P12～P14間が各3mで均一である。〔年代〕新期面上の焼土痕に関連するものと考えられ、館跡最終時期のものとして判断している。

第3号掘立柱建物跡 (第4図)

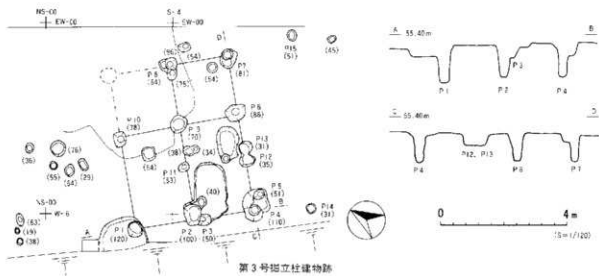
〔位置〕調査区下段の平場 I・J-13グリッドに位置し、段の直下に作られている。〔重複〕第2号竪穴建物跡と重複するが新旧は不明である。また、各柱穴の重複も不明である。P8は第2号竪穴建物跡の柱穴と重複している。〔規模〕一部小穴を検出できなかったため詳細は不明であるが、P1からP12ないしP13で構成される、2間2間の掘立柱建物跡と考えられる。〔柱穴〕柱穴の規模は50cmから60cmと大型である。上端が不整形で抜き取られている可能性がある。深さにはバラツキがあり、



第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡

第4図 掘立柱建物跡

P 1 の最大1.2mからP 4 の1.1m、P 7 の80cmと側柱に深い傾向がある。その他のものは30cm～50cm程である。[柱間寸法] 柱間寸法は最大P 4 とP 6 の3.2mであるが、P 5 とP 6 をとれば対するP 1 とP 10の間隔とほぼ同じである。他の柱間寸法は約1.9mから2m強である。[その他] P 11およびP 12とP 13は、P 2 とP 9、P 5 とP 6 の中間に位置していることから、本建物跡の間仕切りないし補助的なものの可能性がある。P 14とP 15は直接本遺構に係わるものか不明であるが、P 4 とP 7 に対応している。[年代] 新期・古期いずれの時期か不明だが、館跡に伴うものと考えている。

第3節 竪穴建物跡（第5図～第9図）

本遺構は、浪岡城跡の調査で工藤清泰氏が定義した（浪岡城跡Ⅶ：1983）、方形および長方形を基調とした竪穴遺構の底面に、柱穴としての小穴配置があるものである。

平面規模的には長軸が約2～3m程で、底面の隅と壁際にほぼ等間隔に柱穴を持つ。遺構の分布は、段の下の平場に多く、特に斜面際には重複し密集して作られている。

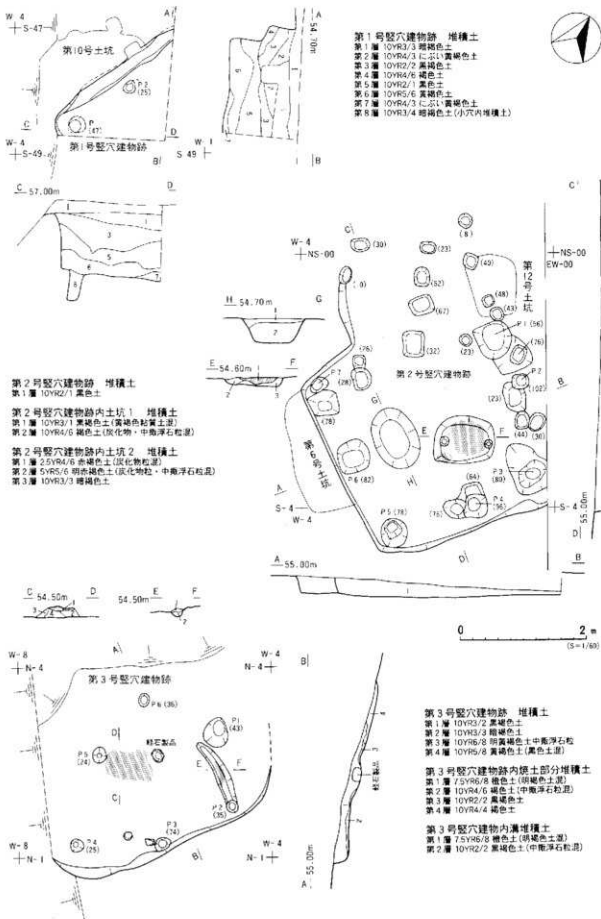
土坑として分類した第2号・11号・15号・27号土坑も、本遺構類である可能性が極めて高い。

第1号竪穴建物跡（第5図）

[位置と確認] 調査区南端1-2グリッドに位置する。表土直下が八戸浮石流凝灰岩面となっており、同面に黒色の不整形な落ち込みで検出した。[重複] 第10号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。[平面形・規模] 大部分が調査区外にあるため全体形は不明である。検出した部分は、北辺隅一部分で2.5m程ある。検出面から底面までの深さは1mある。[堆積土] 7層に分けられる。第8層は柱穴内堆積土である。主体は黒色土で、地山の黄褐色土や軽石層、凝灰岩層のブロックを混入する埋土である。調査区壁面の土層観察から、第1層部分と第5層上面を境に他の遺構が重複している可能性もあるが、面および形状を捉えることができなかった。[底面・壁] 底面は中央に向かい窪んでいる。壁は底面から直に立ち上がる。[柱穴] 2個検出した。隅にあるP 1は深さ47cmでやや斜めである。P 2との間隔は約1.2mある。[出土遺物] 堆積土および底面から陶磁器と鉄滓が出土した。

第2号竪穴建物跡（第5図）

[位置と確認] 下段の平場1-14グリッドを中心に位置する。黒色土の不整形で検出した。[重複] 第6号・12号土坑および第1号掘立柱建物跡と重複する。第6号土坑よりは新しいが、第12号土坑と第1号掘立柱建物跡とは不明である。他、底面に2基の土坑を検出したが、これらは本遺構に伴うものとして扱った。[平面形・規模] 一部調査区外にかかるほか、東辺の壁を捉えることができなかったため詳細には判らないが、舌状に張り出すスロープをもつ形態の可能性が強い。規模は長軸約4.5m、短軸3.5m程のスロープ部分を除けばほぼ方形であったものと思われる。検出面からの深さは最大30cmである。[堆積土] 黒色土の単一層であるが、埋土か自然堆積か判断し兼ねる。[底面・壁] 底面には小さな凹凸がみられ、やや硬化した感じがする。[柱穴] 27個の小穴を検出した。掘立柱建物跡の柱穴と重複しているほか、新旧不明の小穴があり、本遺構に付随する柱穴を明確にできなかった。各小穴の規模と掘形に沿うような配置から、P 番号を付したP 1からP 7までが本遺構に付随するものと考えている。東側の柱穴には抜き取り痕がある。[その他] 2基の土坑を検出した。土坑1は1m×70cmの楕円形で、底面からの深さは40cmある。埋められている。土坑2は1m×80cmの不整形円形で、



第5图 竪穴建物跡(1)

底面からの深さは約20cmである。底面の長軸両端に15cm程の深さの小穴がある。土坑2の第1層は焼土で、本遺構が火を焚くための掘り込みであった可能性がある。[出土遺物] 堆積土と底面から土師器が出土した。

第3号竪穴建物跡（第5図）

[位置と確認] 下段の平地J-15グリッドに位置する。国道に接する攪乱の顕著な部分であるが、中振浮石層面で不整形な落ち込みで検出した。地形は北に向かい傾斜している。[平面形・規模] 国道建設の際に北側と西側を削り取られている。遺存する南辺部分で約3.5mある。[堆積土] 4層に分けられる。第2層～4層は埋土か廃棄土と判断している。第1層は判断しかねる。[底面・壁] 底面は起伏があり、北に向かい傾斜している。また、図示できなかったが底面出土の石製品を中心に60～70cmの範囲で浅く窪んでいる。遺存する南辺の壁は脆い。[柱穴] 6個検出した。P1を除けば、径が20～30cmのものである。深さにはややバラツキがあるもののP2からP4が本遺構の副柱であったものと考えられる。[その他] 遺構内に溝と焼土を検出した。溝は最大幅20cm、長さ1.1m、深さ10cmでP2からP1へ延びるように作られている。焼土は、柔らかく土も若干混入していることから面的に焼かれたものではなく、廃棄の焼土と思われる。石製品の脇に浮いた状態で検出されたが、石製品の上面とほぼ同じ高さで石製品も焼けていることから関連するものと考えている。[出土遺物] 底面のほぼ中央から焼けた軽石製品と壁際から礫が出土した。[小結] 焼土や遺物から、工房的な役割をもった建物跡であった可能性がある。

第4号竪穴建物跡（第6図）

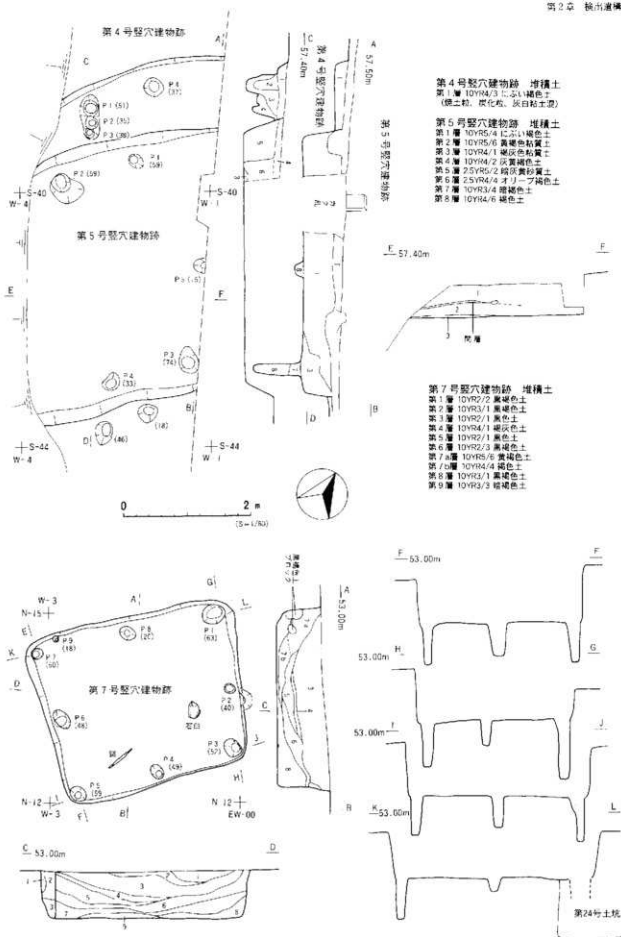
[位置と確認] 上段の平地I-4・5グリッドに位置する。検出時には、第5号竪穴建物跡と重複する土坑（SK-9）としたが、規模と小穴から竪穴建物跡とした。[重複] 第5号竪穴建物跡と重複し、本遺構の方が古い。[平面形・規模] 重複と、国道建設の際の削土により全体形は不明である。検出した北辺で2.5mある。[堆積土] 堅い灰黄褐色土の単一層である。[底面・壁] 底面は平坦である。底面も壁も八戸火山灰流凝灰岩層で堅くしっかりしている。[柱穴] 柱穴と考えられる小穴は4個検出した。P1～P3は連なるように重複している。作り替えであろうか。P1からP4までの間隔は1.2mある。

第5号竪穴建物跡（第6図）

[位置と確認] 上段の平地I-4・5グリッドに位置する。[重複] 第4号竪穴建物跡と重複し、本遺構の方が新しい。[平面形・規模] 一部調査区外に延びているほか、国道建設の際の削土により壊されているため詳細には判らない。検出した部分の東西方向で2.8m、南北方向で4.1m～4.3mある。深さは約50cmである。[堆積土] 竪穴内堆積土は6層に分けられる。各土層面で土層を対比させることができなかったが、全体的に各自然堆積土の混合する埋土である。間層としたものを除けば各層とも堅く緻密である。[底面・壁] 底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。[柱穴] 柱穴と考えられる小穴は5個検出した。P5を除き、南辺のP1とP2、北辺のP3とP4の間隔はほぼ同じで、P1とP3、P2とP4もほぼ等間隔で対峙することから、本遺構の支柱穴であったと考えている。P5は規模的に小さく補助的なものと考えられる。[小結] 本遺構は他の竪穴建物跡より大きく、規模的に第1号竪穴住居跡と類似し平安時代の住居跡の可能性も否めないが、堆積土の状態から本類に含めた。

第6号竪穴建物跡（第8図）

[位置と確認] 下段の平地H-15グリッドに位置し、検出時に土坑（SK-5）として調査したが、



第6図 竪穴建物跡(2)

柱穴の検出から竪穴建物跡に変更した。また、遺物の出土から調査区を一部拡張して調査した。[重複] 東西の壁際に小穴が切り込んでいる。小穴の方が新しい。[平面形・規模] 長軸約2.2m、単軸約1.8mの隅丸長方形である。検出面からの深さは最大60cmある。[堆積土] 5層に分けられる。第3層としたものは地山のブロックであり、全層が埋土である。[底面・壁] 底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。

[柱穴] 平面の壁際に柱穴と考えられる小穴を4個検出した。P1～P3は底面の三隅にあり、規模もほぼ同じである。南西隅には検出できなかった。P4は西辺の中間に作られており、深さはP1～P3の半分ほどである。P4に対峙するものが東辺にあった可能性がある。[出土遺物] 堆積土と底面から陶磁器と多種類の鉄製品が出土した。

第7号竪穴建物跡 (第6図)

[位置と確認] 下段の平場I-18グリッドに位置する。[重複] 完全に切り合っていないが、北辺部分を第9号竪穴建物跡と接している。新旧は不明である。[平面形・規模] 長軸最大3.4m、短軸約2.7mの隅丸長方形である。検出面からの深さは75cmある。[堆積土] 9層に分けられる。第1層から第5層は黒褐色土を主体にした土で、第6層以下は、地山の土に黒色土粒が混入するものである。全層が埋土である。[底面・壁] 底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。[柱穴] 底面より9個の小穴を検出した。すべて周壁直下に作られており、P1～P8は遺構の四隅とその中間に規則的に配置されている。各柱穴の間隔は、P2とP3間が90cmと最小で、最大がP7とP8間の1.5mである。他は1.2m～1.4m程の間隔である。[出土遺物] 堆積土より陶磁器と底面から罫と石白片が出土した。

第8号竪穴建物跡 (第7図)

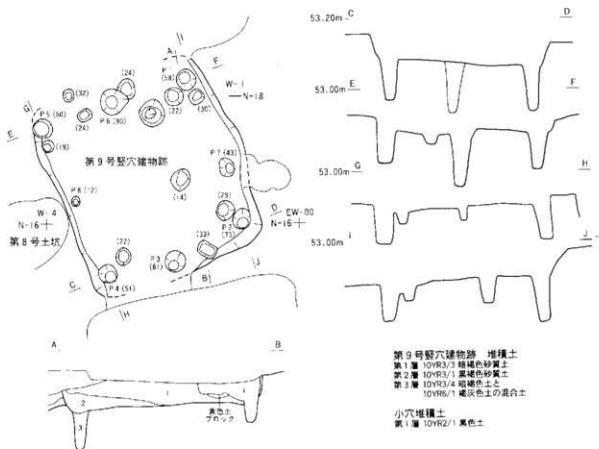
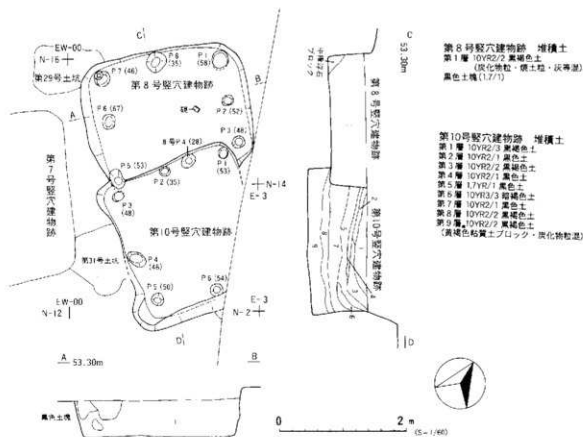
[位置と確認] 下段の平場調査区境界のH-18グリッドに位置する。[重複] 第10号竪穴建物跡と重複し本遺構が古い。[平面形・規模] 長軸最大2.7m、単軸約2mの隅丸長方形である。検出面からの深さは70cmある。[堆積土] 黒色土のブロックが混入する単一層である。[底面・壁] 底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。[柱穴] 周壁直下に8個の小穴が作られている。各柱穴の間隔は約70cm～1mである。[出土遺物] 床面からやや浮いた状態で罫が出土している。

第9号竪穴建物跡 (第7図)

[位置と確認] 下段の平場I-19グリッドに位置する。[重複] 第7号竪穴建物跡と南側部分を接しているほか、第12号竪穴建物跡と重複している。新旧は不明である。[平面形・規模] 約3m四方の方形である。検出面からの深さは約50cmである。[堆積土] 3層に分けられる。第2層と3層は砂を多く含み、部分的に黄色土ブロックがみられる。[底面・壁] 底面は平坦で、壁は底面からやや開くように立ち上がる。[柱穴] P番号を付した、P1～P8までが本遺構の柱穴と考えられる。四隅の柱穴は規模的にほぼ同じで、南北辺のP3とP6がやや大きく深さもある。東西辺のP7とP8は深さ的に違いがあるが、配置的に伴うものと考えている。柱穴の間隔は1m～1.3mである。

第10号竪穴建物跡 (第7図)

[位置と確認] 下段の平場調査区境界のH-18グリッドに位置する。[重複] 第8号竪穴建物跡と重複し本遺構が新しい。[平面形・規模] 南東隅が調査区外にのびるが、約2.4m四方の方形になるものと思われる。[堆積土] 各自然層土粒と炭、焼土粒が混入する黒色土で、9層に分けられる。[底面・壁] 底面は平坦で、壁は中位で屈曲し開くように立ち上がる。[柱穴] 周壁直下に6個の小穴を検出した。調査区外の部分にもあり第8号竪穴建物跡と同様な形態であると思われる。各柱穴の間隔は約70cm



第7図 竖穴建物跡(3)

～1mである。[出土遺物] 堆積土から陶磁器と鉄製品が出土している。遺物の廃棄か埋土中の混入か不明である。

第11号竪穴建物跡 (第3図)

[位置と確認] 下段の平場の土層観察用トレンチ掘り下げにより、土層面で確認した。[重複] 第2号住居跡と重複し、本遺構が新しい。[平面形・規模] 土層面では確認できたが、面的に捉えることができず掘りとはしてしまい全体形は不明である。[堆積土] 黒褐色土の単一層である。[底面・壁] 底面は平坦で、壁は底面から直に立ち上がる。[柱穴] 壁面に1個確認した。

第12号竪穴建物跡 (第8図)

[位置と確認] 調査区北端部J-19・20グリッドに位置する。当初、一つの遺構として捉えていたが土層観察により重複であることが判明した。[重複] 第13号竪穴建物跡・第16号竪穴建物跡・第26号土坑と重複しており、これらの遺構より新しい。また、斜面に切り崩されているほか、西側は攪乱されている。[平面形・規模] 重複等により詳細に判らないが、推定される柱穴から、長軸5m程の大型の建物跡の可能性がある。[堆積土] 黒褐色土を主体にした埋土である。第3層には焼土と炭化物が多量に混入する。第5層とした層は、第3層を切るような線であり本遺構のものか不明である。高さ及び遺物や状況から、第11号竪穴建物跡や第2号住居跡の堆積土とは考えられず、もう一つ遺構が重複していた可能性がある。[底面・壁] 底面は平坦で、ほぼ第13号竪穴建物跡の底面と共有している。壁は土層面だけに確認され、ほぼ直に立ち上がる。[柱穴] 各竪穴建物跡の柱穴と混在し判然としないが、第1図に示したP1からP8ないしP10までの柱穴を本遺構のものと考えている。柱穴の規模は30cm～40cmで、深さはP4の最大93cmで、他は40cm～70cm大である。柱穴の間隔は、東西辺のものが約1m、南辺のものが1.3mと安定している。[出土遺物] 鉄製品の他、底面ほぼ中央からやや浮いた状態で炭化材と炭化した種子が出土している。

第13号竪穴建物跡 (第8図)

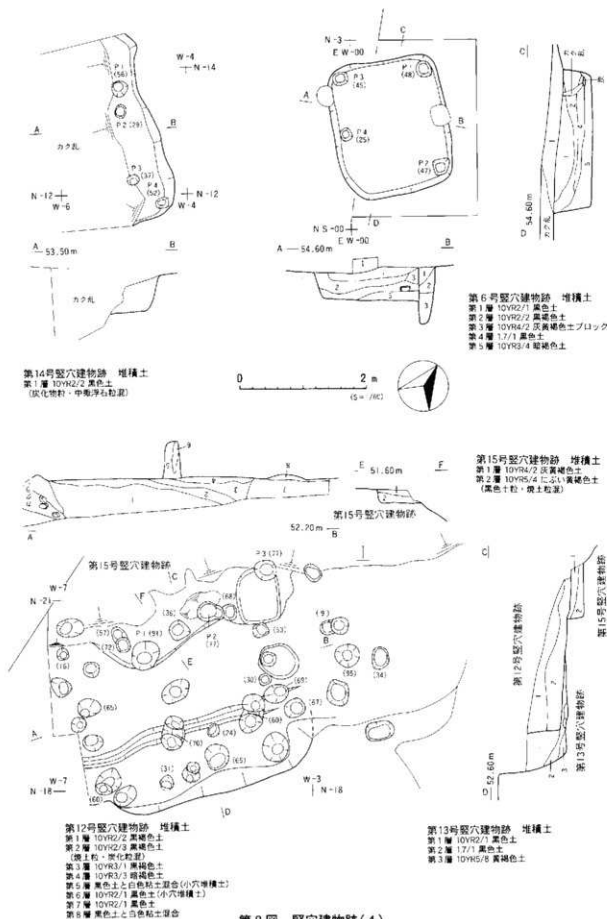
[位置と確認] 調査区北端部J-19・20グリッドに位置する。[重複] 第12号竪穴建物跡と重複しており本遺構が古い。[平面形・規模] 全体形は不明だが、およそ隅丸長方形であったものと思われる。[堆積土] 黒褐色土に焼土と炭化物が混入する埋土で、3層分けられる。[底面・壁] 底面は平坦で、壁は緩い弧状に立ち上がる。[柱穴] 第12号竪穴建物跡と他の柱穴と混在し判然としないが、第1図に示したP1からP7までの柱穴を本遺構のものと考えている。柱穴の規模は30cm～55cmで、深さは50cm～60cm大である。柱穴の間隔は、90cm～1.5mと開きがある。

第14号竪穴建物跡 (第8図)

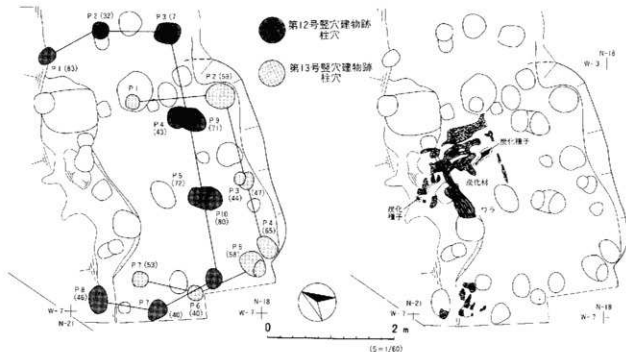
[位置と確認] 下段の平場J-18グリッドに位置する。攪乱の際に溝状の落ち込みとして検出した。[平面形・規模] 国道建設の際に大半を壊されており詳細は不明である。遺存する東辺で約3mある。[堆積土] 黒色土の単層である。[底面・壁] 底面は平坦で、壁は底面からやや開く様に立ち上がる。[柱穴] 底面に4個の小穴を検出した。規模にバラツキがある。P1とP4が伴うものと考えている。

第15号竪穴建物跡 (第8図)

[位置と確認] 調査区の北端部J-20グリッドに位置する。[重複] 第12号竪穴建物跡と第26号土坑および斜面に切り崩されている。[平面形・規模] 全体形は不明である。遺構の隅部分の約2m程が遺存している。[堆積土] 灰黄褐色土と黒色土の混合土の2層に分けられる。[底面・壁] 底面は平坦で、



第8図 竪穴建物跡(4)



第9図 竪穴建物跡(5)

壁は底面から直に立ち上がる。〔柱穴〕南辺部分の柱穴だけが依存している。P番号を付した、P1～P3が本遺構の柱穴と考えられる。深さは約70cm～90cmと特に深い。

第4節 竪穴住居跡（第10図～第13図）

竪穴住居跡は2軒検出した。出土遺物からいずれも平安時代に比定されるものである。2軒の作られている位置から、住居機能時とそれ以後では、館跡の地形が大きく改変されていることが判明した。

第1号竪穴住居跡（第10図、第11図）

〔位置と確認〕調査区のほぼ中央、I-10・11グリッドに位置する。館構築時に造成されたと考えられる段差の直上部分に作られている。黒色土の大きな方形プランで検出した。

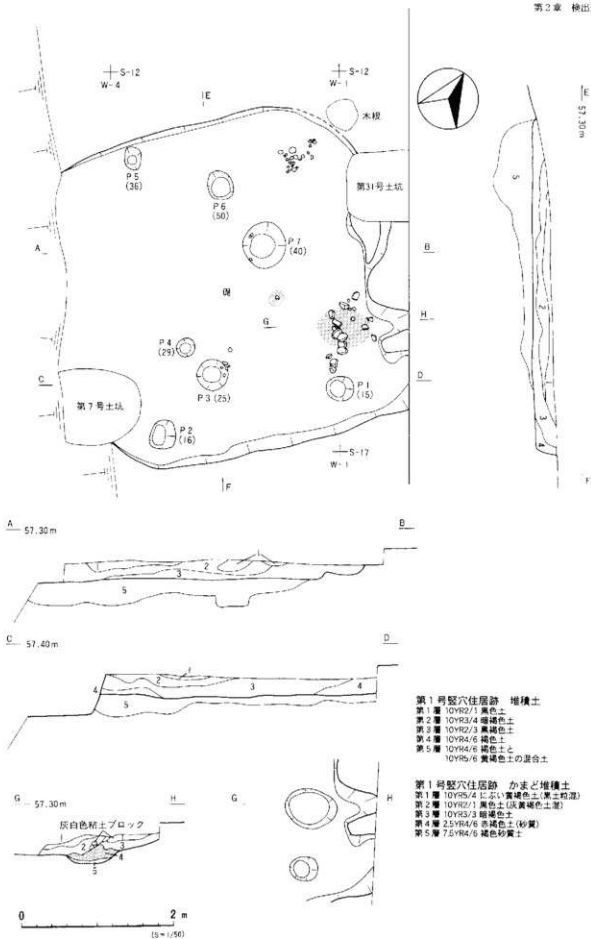
〔重複〕第7号と第31号土坑と重複している。本遺構の方が古い。

〔平面形・規模〕土坑と重複しているほか、国道建設の際に一部を破壊されている。床面の南北軸で約4.1mあり、全体形では4m強の隅丸方形であったものと推察される。

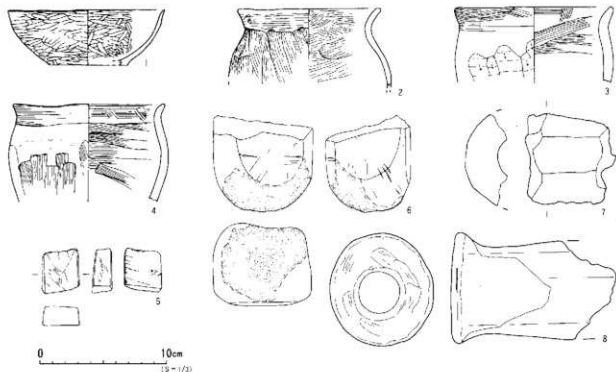
〔堆積土〕住居内堆積土は4層に分けられる。第1層は埋没後、館機能時点での攪乱と思われる。各層に土粒や岩粒、炭化物粒が混入し均質な堆積土ではなく、埋められている可能性がある。第5層は掘形の埋土で、黄褐色土のブロックが多量に褐色土と混合する。

〔床・壁〕床面はほぼ平坦である。特に硬化している部分はみられなかった。掘形底面の起伏は激しい。床面からの深さは5～35cmあり、北西隅部分に向かって深くなっている。壁は床面からほぼ直に立ち上がる。検出面から床面までの深さは20cm程である。かまど北側脇の壁はやや突出し、緩やかな段状に掘られているが、土坑と重複しているため詳細は不明である。

〔かまど〕住居の南東側隅部分に偏在して作られている。煙道は調査区外へ延びているほか、袖部分も崩れているため、かまどの規模は不明である。床面に検出された50cm×70cm程の焼面から、この



第10図 第1号竪穴住居跡



番号	出土地点	グリッド	層位	母体	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	片径(cm)	片厚(mm)	片重(g)	石	質
1	1 住	1-10-11	雑土	灰(土灰部)	12.0	34.0	6.0	ヘラツギ	ヘラツギ	25.5	■	灰燼質粘り強い
2	1 住	1-10-11	雑土	灰(土灰部)	12.0	34.0	—	口縁部コナチ	胴部ヘラツギ	534.3	■	灰燼質粘り強い
3	1 住	1-10-11	雑土	灰(土灰部)	12.0	34.0	—	口縁部コナチ	胴部ヘラツギ	218	■	灰燼質粘り強い
4	1 住	1-10-11	カマド	灰(土灰部)	12.0	34.0	—	口縁部コナチ	胴部ヘラツギ	572	■	灰燼質粘り強い

番号	出土地点	グリッド	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石	質
5	1 住	1-10-11	雑土	砥石	36	29	15	22.5	■	凝灰質粘り強い
6	1 住	1-10-11	雑土	砥石	76	79	67	534.3	■	凝灰質粘り強い

番号	出土地点	グリッド	層位	器種	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	備考
7	1 住	1-10-11	床	羽	6.8	7.2	4.3(2)	218	カマド周辺
8	1 住	1-10-11	床	羽	12.1	8.8	3.3	572	カマド周辺



番号	出土地点	グリッド	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	片径(cm)	片厚(mm)	片重(g)	石	質
9	1 住	0-62	1-2層	灰(土灰部)	13.3	5.3	35.0	コナチ	コナチ	—	■	灰燼質粘り強い
10	1 住	0-9-10	雑土	灰(土灰部)	16.0	15.2	—	口縁部コナチ	胴部ヘラツギ	218	■	灰燼質粘り強い

第11図 第1号竪穴住居跡出土遺物・その他土師器

部分が燃焼部であったと判断している。焼面の上には土師器片のほか、20cm弱の礫が10数個出土している。袖芯材に使われていた礫であった可能性がある。燃焼部は、土層確認から床面ををほぼ焼面と同じ規模と形状に掘り込んだ部分が使われている。

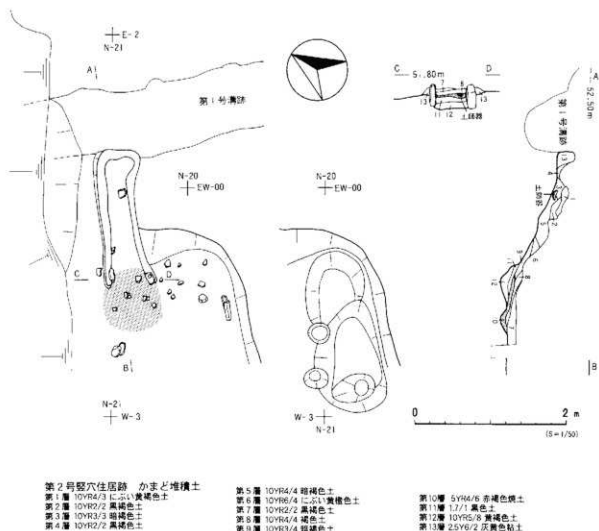
〔柱穴〕住居内からは7個の小穴を検出した。形状は円形および楕円形で、深さはP6が60cmと最大で最小はP1の15cmである。各小穴の深さにバラツキがあることと配置からみて、画一性のある

柱穴、配置ではなかった可能性がある。[出土遺物] 堆積土と床面のかまど周辺と北東隅部分から土師器片・羽口片、覆土から石製品が出土した。第・図1は内外面に細かいミガキが施される環で、底面は回転系切りされる。同図2～4は小型の甕で、2は狭い口縁部をもち、頸部で屈曲する。内外面共にヘラナデされる。同図3と4は口縁部がつまみ出されたように外反する。3の外表面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。4は内外面共にヘラナデされる。同図5と6は砥石である。5は手持ちの砥石で、6は鎌を利用した台砥石である。6の端部には敲打の痕跡が見られる。同図7と8は羽口である。共に枠押さえで作られ、指頭およびヘラナデで調整されている。[小結] 出土土師器から平安時代、9世紀末葉から10世紀前半期頃のものとする。

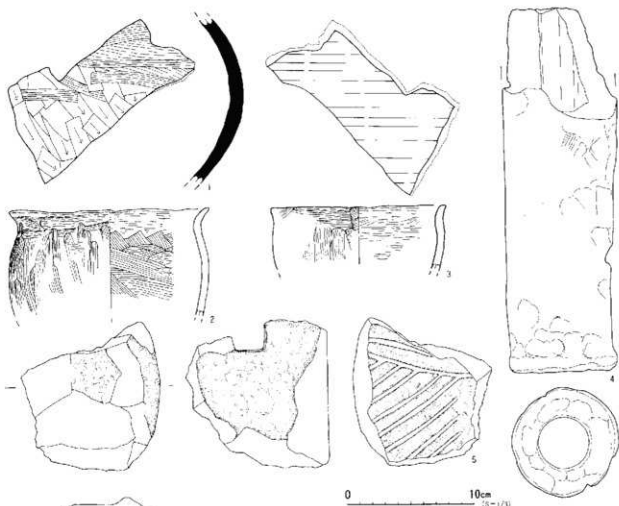
第2号竪穴住居跡 (第12図、第13図)

[位置と確認] 館跡の北側縁、斜面への落ち際に位置する。竪穴建物跡群の精査時に、かまどを検出し竪穴住居跡と判明した。ほぼ、かまど部分だけが遺存している。

[重複] 竪穴建物跡群と重複し本遺構の方が古い。煙道先端部分が第1号溝跡と重複しており、本遺



第12図 第2号竪穴住居跡



品名	出土状況	形状	厚さ	口径	底径	高さ	重量	備考
1	1F-11	片	0.5	10.0	10.0	1.0	1.0	100g
2	1F-12	片	0.5	10.0	10.0	1.0	1.0	100g
3	1F-13	片	0.5	10.0	10.0	1.0	1.0	100g
4	1F-14	片	0.5	10.0	10.0	1.0	1.0	100g
5	1F-15	片	0.5	10.0	10.0	1.0	1.0	100g



番号	出土状況	形状	厚さ	口径	底径	高さ	重量	備考
6	1F-16	片	0.5	10.0	10.0	1.0	1.0	100g
7	1F-17	片	0.5	10.0	10.0	1.0	1.0	100g
8	1F-18	片	0.5	10.0	10.0	1.0	1.0	100g
9	1F-19	片	0.5	10.0	10.0	1.0	1.0	100g
10	1F-20	片	0.5	10.0	10.0	1.0	1.0	100g

第13図 第2号竪穴住居跡出土遺物、その他須恵器

構の方が新しいと判断した。本遺構および関係する遺構は、館の斜面を再構築する際に削られている。

〔平面形・規模〕 遺存している部分は、かまどと住居南東隅部分だけであり全体形は不明である。

〔堆積土〕 堆積土については、堅穴建物跡と判別できなかった。

〔床・壁〕 床面は、堅穴建物跡の床面と同一面である。かまど焚口部分は硬化していた。壁は直に立ち上がる。堅穴建物跡と検出面を同じくし、床面までの深さは1.1~1.3mある。掘り込み面を考慮すればさらに深かったものと思われる。

〔かまど〕 かまどは地下式であったものと思われる。天井部は崩落している。袖から煙道、煙出孔まで灰白色の粘土が10cm程の厚さで貼り付けられ構築されている。両袖の芯材には扁平な礫が用いられている。煙道は焚口から25程度の傾斜で煙出孔に立ち上がる。煙出孔までの長さは1.5m程ある。

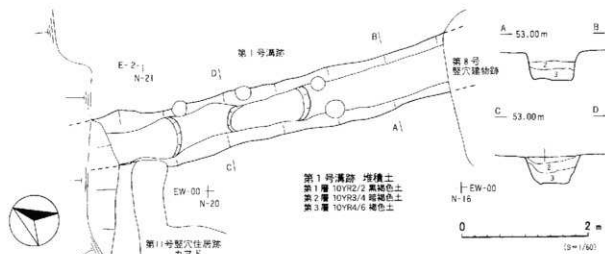
〔その他〕 かまど脇に不整楕円形の土坑が作られている。楕円形状のもので、床面からの深さは26~36cmある。形状から作り直されているものと考えている。

〔出土遺物〕 カマド付近や覆土から土師器片・須恵器片・羽口片・石製品が出土している。第・図1は須恵器の壺と思われる。ヘラケズリの後ヘラナゲされる。同図2と3は小型の甕で、内外面ヘラナゲされる。同図4の羽口はほぼ半分に折れている。主に指頭により調整され、その上をヘラナゲされている。同図5は上白の破片である。

〔小結〕 出土土師器から平安時代、9世紀末葉から10世紀前半期頃のものとする。

第5節 溝跡 (第14図、第11図)

調査区の北縁辺部、H-19・20グリッドに位置する。斜面および堅穴建物跡、第2号堅穴住居跡と重複し、本遺構の方が古い。検出遺存する部分で幅約90cm、長さは約5.5mある。深さは検出面から50cmである。底面はやや起伏があり、南側から北に向かい緩く傾斜している。また、底面の二ヶ所に楕円形の浅い窪みをもつ。堆積土は黒褐色土が主体で3層に分けられる。特に流水の痕跡は見受けられない。本遺構は、重複から第2号堅穴住居跡構築時には既に埋没していたものと考えられる。遺物は堆積土中より、第11図10の小型の甕が出土した。口縁部は頸部でくの字に屈曲し、ヨコナゲされる。内外面共にヘラケズリされる。



第14図 第1号溝跡

第6節 焼土（第4図）

下段の平場に22箇所、上段の平場に5箇所の焼土跡を検出した。焼土の規模および焼成にはバラツキがある。下段の平場の焼土は密集した状態にあり、柱穴と考えられる小穴に囲まれるように位置している。すべて新期面上で焚かれており、掘立柱建物跡に関連する地床がないし囲炉裏であったと考えている。上段の平場の焼土については、状況的に帰属時期を捉えることができない。（小田川）

第7節 土坑

本調査で検出された土坑は総数34基である。調査時点でSK-5とSK-9としたものは、竪穴建物跡へ、SK-19は小穴とした。これらの土坑の中には、形態から縄文時代に比定される溝状土坑が3基あることから分けて記述することにする。記述に際しては、重複のないものや、遺物が出土しないものについては項目を削除する。

縄文時代以外の土坑（第15図～第17図）

総数26基が検出された。国道建設の際に削土されたものがあるほか、重複や調査区外へ延びるものもあり、全体形を確認できるものは少ない。大半が館跡機能時のものと考えられるが、近代の土坑や帰属時期不明なものもある。

第1号土坑（第15図）

〔位置〕 調査区南端I-3グリッドに位置する。〔規模・形態〕 国道建設時の削土により全体形は不明である。遺存する底面で1.7m×1.4mある。〔堆積土〕 7層に分けられる。全体的に黒褐色土を主体とする。第1層から第6層まで炭化物粒・ロームブロックが混入する埋土である。〔壁・底面〕 遺存する両壁で90cmある。底面はほぼ平坦である。〔出土遺物〕 堆積土から陶磁器8点が出土した。

第2号土坑（第15図）

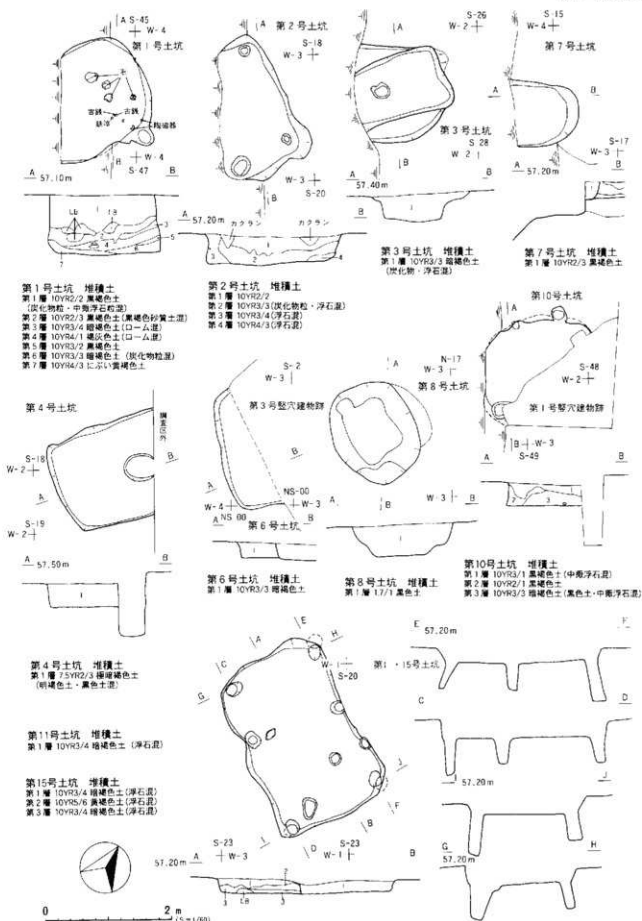
〔位置〕 調査区中央I-10グリッドに位置する。〔規模・形態〕 国道建設時の削土により全体形は不明である。遺存する底面で約2m×1mである。〔堆積土〕 4層に分けられる。黒褐色土を主体とする埋土である。〔壁・底面〕 遺存する壁は47cmで、底面はほぼ平坦である。〔出土遺物〕 堆積土から石製品2点が出土した。

第3号土坑（第15図）

〔位置〕 調査区中央I-8グリッドに位置する。〔規模・形態〕 国道建設時の削土により全体形は不明である。遺存する底面で84cm×1.5mある。〔堆積土〕 暗褐色土に浮土と炭化物粒を含む単層である。埋土である。〔壁・底面〕 底面から30cmほど立ち上がったところに平面を持つ。堆積土では判別できなかったが、重複の可能性もある。底面はほぼ平坦である。〔出土遺物〕 堆積土中より多量の近世に比定される陶磁器が出土した。

第4号土坑（第15図）

〔位置〕 調査区中央部I-10グリッドに位置する。〔重複〕 小穴と重複しており、小穴の方が新しい。〔規模・形態〕 調査区外に延びているため全体形は不明であるが、方形になるものと思われる。〔堆積土〕 極暗褐色土に明褐色土と黒色土の混合する単層の埋土である。〔壁・底面〕 壁高は、約34cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。〔出土遺物〕 堆積土から陶磁器が出土した。



第15図 土坑(1)

第6号土坑 (第15図)

[位置] 調査区北側I-15グリッドに位置する。[重複] 第3号竪穴建物跡と重複しており、本遺構の方が古い。[規模・形態] 竪穴遺構に壊されており全体形は不明であるが、方形になるものと思われる。

[堆積土] 暗褐色土に、黒色土と中礫浮石を含む単層の埋土である。[壁・底面] 壁高は26cmで、底面はほぼ平坦である。[出土遺物] 堆積土中より石製品1点が出土した。

第7号土坑 (第15図)

[位置] 調査区中央部I-10グリッドに位置する。[重複] 第1号竪穴住居跡と重複しており、本遺構の方が新しい。[規模・形態] 国道建設の際に壊されており全体形は不明であるが、楕円形になるものと思われる。遺存する底面で94cm×80cmである。[堆積土] 黒褐色土の単層で埋土である。[壁・底面] 壁高は約47cmでほぼ直に立ち上がる。底面は平坦である。

第8号土坑 (第15図)

[位置] 調査区北側I・J-18・19グリッドに位置する。[規模・形態] 開口部で長径1.6m、短径1.3m、底面が長径88cm、短径73cmのほぼ円形である。[堆積土] 黒褐色土の単層で埋土である。[壁・底面] 壁高は45cm～50cmで、南壁側が若干低い。底面はほぼ平坦である。

第10号土坑 (第15図)

[位置] 調査区南側I-2・3グリッドに位置する。[重複] 第1号竪穴建物跡と重複しており、本遺構の方が新しい。[規模・形態] 竪穴建物跡により壊されており、全体形は不明である。[堆積土] 3層に分けられる。黒褐色土を主体とする埋土である。[壁・底面] 遺存する北壁で約35cmある。底面はほぼ平坦である。

第11号土坑 (第15図)

[位置] 調査区中央部I-9グリッドに位置している。[重複] 第15号土坑と重複しており、本遺構の方が新しい。[規模・形態] 掘りあげてしまったため全体形は不明であるが、隅丸方形であると考えられる。[堆積土] 暗褐色土に黒褐色土と褐色土、浮石を含む単層の埋土である。[壁・底面] 遺存する北壁の高さは約18cmである。底面は平坦で、第15号土坑と底面を共有する。本遺構は、竪穴建物跡の可能性もある。

第12号土坑 (第16図)

[位置] 調査区北側I-15グリッドに位置する。[重複] 小穴および第3号竪穴建物跡と重複する。新旧は本遺構より小穴の方が新しいが、竪穴建物跡とは不明である。[規模・形態] 重複により全体形は不明であるが、方形になるものと思われる。底面の南北隅に、深めの掘り込みを持つ。遺存する底面で83cm×46cmである。[堆積土] 2層に分けられる。ロームを多量に含む埋土である。[壁・底面] 遺存する壁高は約40cmである。底面はほぼ平坦である。

第13号土坑 (第16図)

[位置] 調査区北側J-19グリッドに位置する。[規模・形態] 開口部の長径1.2m、短径1.4m、底面長径約1m、短径85cmの隅丸方形である。[堆積土] 黒色土の単層で、埋土である。[壁・底面] 壁高は25cm～35cmで、南西側がやや高くなっている。底面はほぼ平坦である。

第14号土坑 (第16図)

[位置] 調査区北側I-17グリッドに位置している。[規模・形態] 開口部の長径約1m、短径80cm、

底面長径90cm、短径75cmの隅丸方形である。[堆積土] 黒褐色土の単層で、埋土である。[壁・底面] 壁高は約10cmである。南壁は緩やかな傾斜でやや高い。底面は起伏があり、東側の隅に小穴を持つ。

第15号土坑 (第15図)

[位置] 調査区中央部1-9グリッドに位置している。[重複] 第11号土坑と重複しており、本遺構の方が古い。[規模・形態] 土坑に壊されており全体形は不明であるが、隅丸方形であると考えられる。[堆積土] 3層に分けられる。暗褐色土を主体とする埋土である。[壁・底面] 遺存する壁高は約24cmである。底面はほぼ平坦である。

第16号土坑 (第16図)

[位置] 調査区中央J-13グリッドに位置する。[規模・形態] 開口部で長径2m、短径約1m、底面が長径1.8m、短径95cmの楕円形である。[堆積土] 2層に分けられる。埋土である。[壁・底面] 壁高は約20cmである。底面には起伏があり、南西側の隅に小穴を持つ。[出土遺物] 堆積土より石製品1点が出土した。

第17号土坑 (第16図)

[位置] 調査区北側J-14グリッドに位置する。[重複] 小穴と重複しており、本遺構の方が古い。[規模・形態] 国道建設時に壊されており、全体形は不明である。遺存する底面で1.3m×90cmである。[堆積土] 暗褐色土の単層の埋土である。[壁・底面] 壁高は約15cmある。底面はほぼ平坦である。

第18号土坑 (第16図)

[位置] 調査区南側I-7グリッドに位置する。[重複] 小穴と重複するが、新旧は不明である。[規模・形態] 小穴に壊されており全体形は不明であるが、円形であると考えられる。[堆積土] 2層に分けられる。にぶい黄褐色を主体とする混合土の埋土である。[壁・底面] 遺存する壁高は20cmである。底面は平坦である。

第20号土坑 (第16図)

[位置] 調査区北側I-6グリッドに位置する。[規模・形態] 調査区外へ延びるため全体形は不明である。[堆積土] 2層に分けられる。第2層はにぶい黄褐色土との混合土である。埋土である。[壁・底面] 遺存する壁高は約32cm程である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

第21号土坑 (第16図)

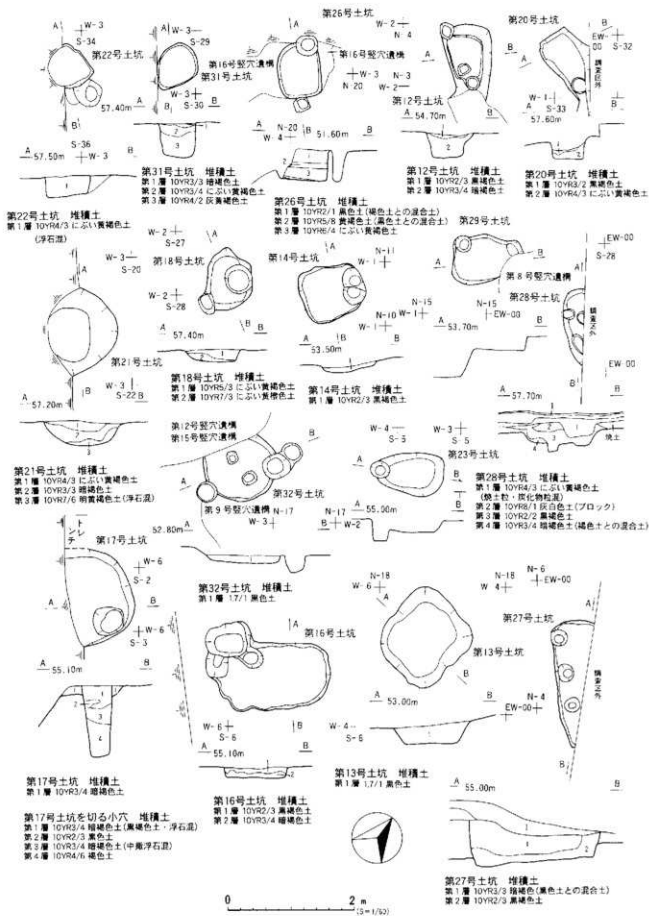
[位置] 調査区中央部I-9グリッドに位置する。[規模・形態] 国道建設時の削土により全体形は不明であるが、円形になるものと思われる。遺存する底面で84cm×66cmである。[堆積土] 3層に分けられる。全層に黄褐色土を混合する埋土である。[壁・底面] 壁高は43cmで、底面は鍋底状である。

第22号土坑 (第16図)

[位置] 調査区南側I-6グリッドに位置する。[重複] 小穴と重複し、本遺構の方が新しい。[規模・形態] 国道建設時に壊されており不明であるが、円形になると思われる。遺存する底面で60cm×65cmである。[堆積土] にぶい黄褐色土にロームブロック等を混入する埋土である。[壁・底面] 壁高は約34cmである。底面はほぼ平坦である。

第23号土坑 (第16図)

[位置] 調査区中央J-13グリッドに位置する。[重複] 小穴と重複するが、新旧は不明である。[規模・形態] 遺存する開口部で長径約1m、短径62cm、底面長径75cm、短径47cmの楕円形である。[堆積土]



第16図 土坑(2)

掘りあげてしまったため不明である。[壁・底面] 壁高は約15cmである。底面は平坦である。

第26号土坑 (第16図)

[位置] 調査区北側I-9グリッドに位置する。[重複] 第16号竪穴建物跡と重複しているほか、斜面に壊されている。[規模・形態] 全体形は不明であるが、隅丸方形になるものと考えられる。遺存する底面で約80cm×50cmである。[堆積土] 3層に分けられる。第1層は黒色土と褐色土の混合土で、第2層はロームを主体とし黒色土を斑状に混入する。埋土である。[壁・底面] 壁高は約50cmである。底面はほぼ平坦である。

第27号土坑 (第16図)

[位置] 調査区中央部I-13グリッドに位置する。[規模・形態] 調査区外へ延びるため全体形は不明である。[堆積土] 2層に分けられる。第1層は暗褐色土と黒色土の混合土である。埋土である。[壁・底面] 遺存する壁高は約66cm程である。底面の壁際には、3個の小穴が並んでいることから、竪穴建物跡になる可能性もある。底面はほぼ平坦である。

第28号土坑 (第16図)

[位置] 調査区南側I-7グリッドに位置する。[規模・形態] 調査区外へ延びるため全体形は不明である。[堆積土] 4層に分けられる。第1層は、炭化物粒と焼土粒が含まれる。第2層は灰白色土ブロックである。第4層は暗褐色土と黒色土との混合土である。埋土である。[壁・底面] 遺存する壁高は約20cm程である。底面はほぼ平坦で、壁際に浅い小穴を持つ。

第29号土坑 (第16図)

[位置] 調査区北側H-19グリッドに位置する。[重複] 第8号竪穴建物跡と重複し、本遺構の方が古い。[規模・形態] 竪穴建物跡との重複で不明である。遺存する底部で77cm×63cmある。[堆積土] 掘りあげてしまったため不明である。[壁・底面] 壁高は約25cm程である。底面はほぼ平坦である。

第31号土坑 (第16図)

[位置] 調査区中央I-11グリッドに位置する。[重複] 第1号竪穴住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。[規模・形態] 調査区外へ延びるため全体形は不明であるが、方形になると思われる。遺存する底部で70cm×80cmある。[堆積土] 掘りあげてしまったため不明である。[壁・底面] 壁高は約10cm程である。底面はほぼ平坦である。

第32号土坑 (第16図)

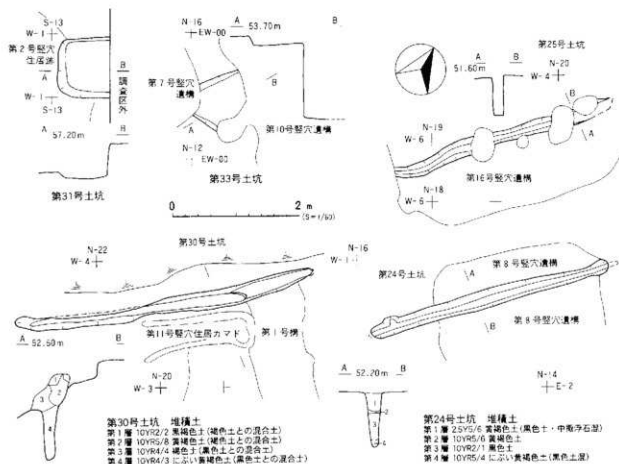
[位置] 調査区北側I-19グリッドに位置する。[重複] 第9号、第12号、第13号竪穴建物跡、小穴と重複するが、新旧は不明である。[規模・形態] 重複のため全体形は不明であるが、円形になると思われる。[堆積土] 黒色土の単層である。[壁・底面] 壁高は約10cmである。底面は平坦である。

第33号土坑 (第16図)

[位置] 調査区北側H-19グリッドに位置する。[重複] 第7号、第8号竪穴建物跡と重複するが新旧は不明である。[規模・形態] 竪穴遺構に壊されているため不明である。[堆積土] 掘りあげてしまったため不明である。[壁・底面] 遺存する壁高は約15cmである。底面はほぼ平坦である。

縄文時代の土坑 (第17図)

形態的に溝状となるもので3基検出された。すべて調査区北端のH・I-18~20グリッドに集中



第17図 土坑(3)

している。遺構の上部は、古代および中世の遺構により壊されている。

第24号土坑 (第17図)

[位置] 調査区北側、H-18グリッドに位置する。[重複] 第8号堅穴建物跡と重複し、本遺構の方が古い。[規模・形態] 溝状に遺存する底面で3.9mある。[堆積土] 4層に分けられる。第1層は黄褐色土に黒色土粒と中振浮石が混合する。[壁・底面] 遺存する壁高は82cmである。底面は平坦で、両端部は内反する。

第25号土坑 (第17図)

[位置] 調査区北側K・J-19グリッドに位置する。[重複] 第12号堅穴建物跡と重複し、本遺構が古い。[規模・形態] 溝状に遺存する底面で約3mある。[堆積土] 掘りあげてしまったため不明である。[壁・底面] 遺存する壁高は北壁で62cmある。底面はほぼ平坦である。

第30号土坑 (第17図)

[位置] 調査区北側、I-19グリッドに位置する。[重複] 第2号堅穴住居跡と第1号溝跡に重複し、本遺構が古い。[規模・形態] 溝状に遺存する底面で4.5mある。[堆積土] 4層に分けられる。黄褐色土を主体とする。第1層と第2層は褐色土を混合し、第3層と第4層には黒色土を混合する。[壁・底面] 遺存する壁高は最高で73cmある。底面はほぼ平坦だが、北側に緩い段差を持つ。(小山)

第3章 出土遺物

第1節 陶磁器

伝法寺館跡から出土した陶磁器類は総数約195点である。これらは、船載陶磁器と国産陶磁器の2つに大別でき、さらにそれぞれの器種ごとに分けられる。以下にその特徴を記述するが、小破片で船載陶磁か国産陶磁か判断しかねるものや、近代陶磁器もある。なお、遺構内や遺構外の選別と時期的な選別は、文章中または、観察表に明記した。

船載陶磁器

船載陶磁器の種類には、染付・青磁・白磁があり、それぞれをさらに器形ごとに分類した。分類については、「貿易陶磁研究」NO.2:1982から、小野正敏氏、上田秀夫氏、森田勉氏の分類および編年を参考とさせて頂いたが、誤記載等は、全て筆者の責任である。

染付 (第18図)

総数10点出土した。すべて破片で器形や文様が判然としているものはない。これらは、明産のものと思われる。時期は、呉須の発色や文様構成から15世紀～16世紀に比定される。器種は、ほとんどが皿で椀が1点ある。

椀：第18図1は、口縁は直行して立ち上がる器形である。文様は、外面口縁部に雷文を施し、その下位には松竹梅文の松模様が見られる。内面口縁部には、2本の界線のみが確認できる。

皿：第18図2～12までである。器形的には、口縁端反りの、底部は碁箱底となるもので、いずれも似たような器形になると推定される。分量については明確でないが、口径が約10cm前後、器高が約2cm～3cm程になるものと思われる。文様は、第18図2には、外面口縁部に1本の界線を施し、その下位には、牡丹唐草文が描かれる。内面口縁にも幅広の界線が施され、見込み部分には、二重の界線と、破片で判然としませんが、十字花文ないしは玉取獅子が描かれているようである。同図3～7の口縁内外面にも界線が施され、胴部には唐草文が描かれる。同図8の見込みには花卉文が描かれている。同図10と11は底部細片で、判然としませんが輪花文と竜文を思わせるものが描かれている。

同図12は赤絵皿の破片で1点だけ出土した。推定口径であるが約17cmと大きく、端反り口縁の内外面には二重の界線が施され、内外面には唐草文が描かれる。

青磁 (第19図)

8点出土した。器種には、椀と皿がある。龍泉窯系の製品と考えられる。

椀：第19図1は、底部破片であり、厚さもあることから大ぶりの碗になると思われる。削り高台であり、高台内は丸く軸剥ぎされている。同図3～4は、山形蓮弁文と線描蓮弁文が描かれるもので、蓮弁の幅は狭く、葉先と側線が一致しない程の簡略化されたものである。3と5は同一個体の可能性がある。

皿：第19図2と6は、稜花皿の破片である。器形的には、口縁部がかなり外側に開く皿と思われる。同図7は、口縁が端反りする器形である。すべて小破片で、分量も推定できず詳細は明らかではない。

白磁 (第20図)

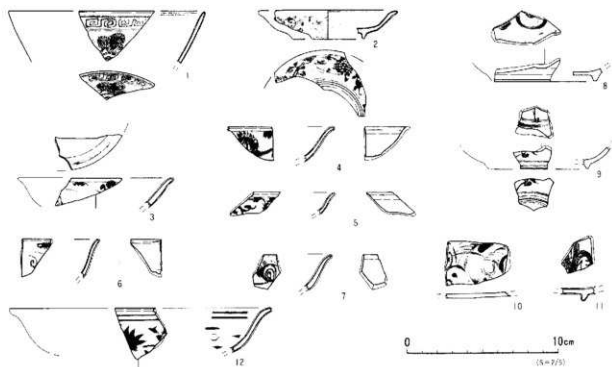
8点出土した。器種は皿だけである。器形は、1点を除き、他は端反り皿である。分量は口径が約

11cm～14cm程で、器高は2.5cm～4cm程である。

第20図1は、付け高台の端反り皿である。底裏は、平坦にはならず緩く湾曲する。同図2は、削り出し高台のものである。二次的な被熱により器面は荒れている。

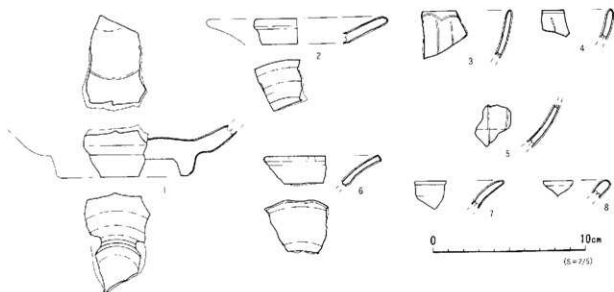
同図3は、口径8cmの小皿である。底部は碁笥底で、軸割ぎされている。底から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁は直立する。内面の腰部には蓮弁文が施文され、見込みの中央部には、魚（ナマズ?）と思われる文様が描かれる。

これらの舶載磁器は、时期的には15世紀末から16世紀期末までの範疇で捉えられるものと思われるが、第18図12の赤絵はそれ以前の可能性があること、第20図4と6の白磁は、胎土から見て18世紀～19世紀頃のものの可能性がある。



番号	出土地	グリッド	層位	名称	器形	産地	口径	器高	底径	時期・年代	備考
1	1	全	1-3	底部	安付	鉢	中国 (13.0)	<3.5>	-	15～16 C	外歯筋文、松竹梅文
2	遺構外	-	1-9	不明	染付	皿	中国 (10.3)	<1.9>	-	15～16 C	外歯筋文
3	4	全	1-10	底部	染付	皿	中国	<2.8>	-	15～16 C	外歯牡丹唐文
4	上段小穴	1-0	層土	染付	皿	中国 (9.2)	1.9	(4.6)	-	15～16 C	外歯牡丹唐文
5	1	遺	1-1	層土	染付	皿	中国	<2.2>	-	15～16 C	外歯牡丹唐文
6	不明	不明	不明	染付	皿	中国	<1.6>	-	-	15～16 C	外歯唐文
7	5	整	1-4	層土	染付	皿	中国	<2.3>	-	15～16 C	外歯牡丹唐文
8	11	土	1-9	層土	染付	皿	中国	<1.6>	(7.1)	13～16 C	見込花文?
9	遺構内	1-1	2	層土	染付	皿	中国	<1.7>	(6.6)	13～16 C	胎土以外は不明
10	遺構内	11-1	9	層土	染付	皿	中国	<0.4>	-	15～16 C	見込輪花文?
11	遺構内	1-1	2	層土	染付	皿	中国	<0.9>	-	15～16 C	唐文?
12	遺構外	1-1	9	A層	赤絵	皿	中国 (17.4)	<2.9>	-	15～16 C	外歯牡丹唐文、赤、緑色

第18図 舶載陶磁器(1)



番号	出土地点	グリップ	層位	名称	図形	産地	口径	器高	底径	貯容・年代	備考
1	遺構外	H-18	A層	青磁	碗	中国	-	<3.3>	(8.4)	15~16C	遺台内胎割さ
2	遺構外	I-16	A層	青磁	盃	中国	(12.0)	1.7	(7.0)	15~16C	緑花蓋
3	不明	跡土	不明	青磁	口	中国	-	<1.9>	-	15~16C	緑花蓋
4	不明	小跡土	不明	青磁	碗	中国	-	<3.2>	-	15~16C	
5	遺構外	I-17	A層	青磁	柄	中国	-	<1.9>	-	15~16C	蓮弁文
6	10 型	II-18	層上	青磁	碗	中国	-	<2.7>	-	15~16C	蓮弁文
7	不明	不明	不明	青磁	皿?	中国	-	<1.7>	-	15~16C	無文
8	1 土	I 03	跡土	青磁	皿	中国	-	<1.0>	-	15~16C	無文

第19図 船載陶磁器(2)

国産陶磁器

国産陶磁器は、総数約150点出土した。瀬戸美濃系を主体に出土しているほか、肥前系の唐津と染付も出土している。また、産地不明なものや時期不明なものもある。第3号土坑からは、近世に比定される遺物が出土しており、本節でまとめて記述する。

瀬戸美濃系 (第21図～第23図)

総数約40点が出土した。本類には、大窯期のものと登釜期のものがあることから、これらを各時期別に記述する。なお、分類基準には井上喜久男氏の「愛知県陶磁資料館研究紀要9」：1990の編年を引用参考にした。誤記載等については全て筆者の責任である。

大窯Ⅰa期 (第22図6～8)

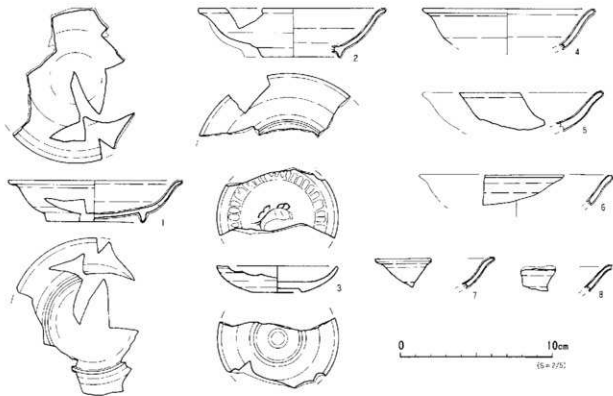
灰釉平碗で、口縁部破片のみである。それほど内碗せず、直立するような口縁部にはならないことから、平碗とした。外面に山形・線描蓮弁文を施す。

大窯Ⅰb期 (第23図11)

天目茶碗である。やや茶色がかった鉄釉が、全体に施されている。口縁部がく字状にくびれ、器厚はくびれから口縁に向けてかなり薄く、4mm～2mmである。破損部を漆で接合した痕跡がある。

大窯Ⅱb期 (第21図1～3、5、6、第22図17)

灰釉の丸皿が6点出土した。器形は、胴部でゆるく屈曲し、口縁部が端反る皿である。見込み部には、すべて菊花文が浅く押印されている。底面には胎土目が見られる。



番号	出土地点	グリット	別称	名称	器形	産地	口径	器高	底径	時期・年代	備考
1	10 壺	H-18	覆土	白磁	皿	中国	(11.22)	2.7	(6.2)	1.5~1.6 C	焼貫溝手
2	4 土	1-10	覆土	白磁	皿	中国	(12.6)	3.2	(6.4)	1.5~1.6 C	朝顔状
3	遺構外	1-10	B帯	白磁	皿	中国	(8.0)	(1.7)	(3.4)	1.5~1.6 C	魚状文様入り(イマズ?)
4	1 土	1-03	覆土	白磁	皿	中国	(11.2)	(2.5)	-	1.8~1.9 C	焼貫溝手磁器化進打
5	7 塼	I-18	3層上	白磁	皿	中国	(5.9)	(2.5)	-	1.5~1.6 C	焼貫溝手
6	不明	不明	不明	白磁	皿	中国	(13.8)	(2.0)	-	1.8~1.9 C	焼貫溝手、磁器化進打
7	4 土	1-10	覆土	白磁	皿	中国	-	(1.9)	-	1.5~1.6 C	焼貫溝手
8	2 壺	1-14	覆土	白磁	皿	中国	-	(1.7)	-	1.5~1.6 C	焼貫溝手

第20図 船載陶磁器(3)

大窯Ⅰ～Ⅱ期 (第21図4、第22図1～4、9、14)

灰釉の丸皿が8点出土した。細かな分類が難しいため、Ⅰ～Ⅱ期に含まれるものとした。器形は、すべて端反るものである。口径は推定で約10～12cmの間に収まり、器高は2～3cm内である。

大窯Ⅲ期 (第22図5)

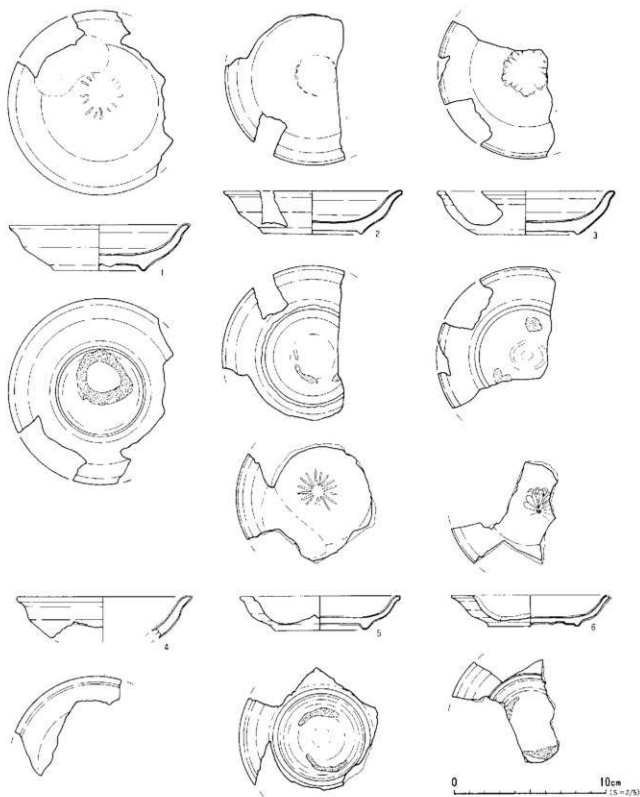
灰釉の丸皿の口縁部破片が1点出土した。器形は、口縁部下位でやや大きめに内湾し、そのまま立ち上がるものである。今回出土した丸皿のなかでは、明らかに器形が異なる。

大窯Ⅳ期 (第23図4～7、9、10、12、14)

大窯Ⅳ期の製品は器種が多様で、灰釉香炉、鉄釉椀(天目)、鉄釉折縁皿、志野丸皿、志野折縁皿、志野稜花皿などがある。以下に器種別に記述する。

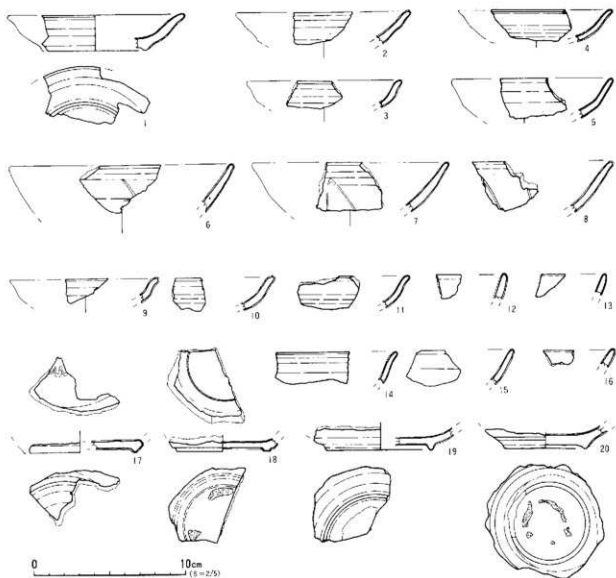
灰釉香炉(第23図4)は、底部のみの出土であるが、器形は、いわゆる袴腰状になるものと推定される。底部は全体が無釉であり、腰部から折れ曲がって立ち上がる部分から施釉されている。また、平たい脚部となる部分も貼付されている。

鉄釉天目茶碗は3点出土した。(第23図9、10、14) 14は外面胴部の下位が無釉で素地が露出して



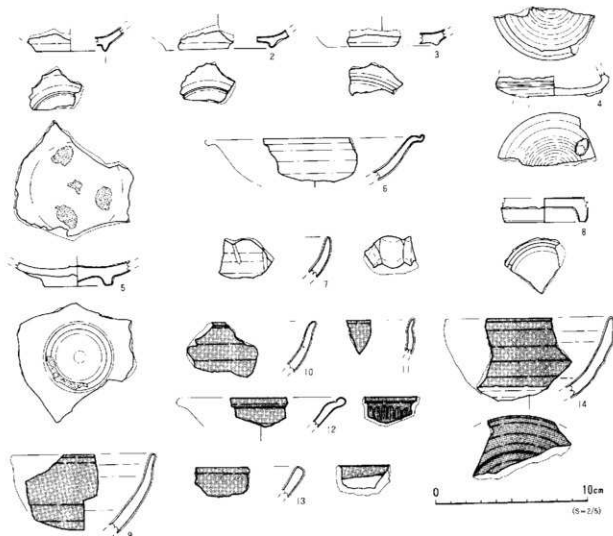
番号	出土地点	グリッド	層位	名称	器形	産地	口径	器高	底径	時期・年代	備考
1	土	I-03	埋土	陶鉢	丸皿	瀬戸・美濃	(12.2)	3.0	(6.0)	16 C 中	菊文・粘土目
2	土	I-02	埋土	陶鉢	丸皿	瀬戸・美濃	(11.8)	2.8	(6.6)	16 C 中	菊文
3	土	H-15	底土	陶鉢	丸皿	瀬戸・美濃	(11.8)	2.8	(6.6)	16 C 中	菊文
4	土	I-02	I層	陶鉢	丸皿	瀬戸・美濃	(11.6)	(2.7)	-	15 C 末-16 C 初	
5	遺構内	J-19	B層	陶鉢	丸皿	瀬戸・美濃	(10.6)	2.3	6.0	16 C 中	菊文・粘土目
6	土	I-18	埋土	陶鉢	丸皿	瀬戸・美濃	(10.6)	2.1	(5.6)	16 C 中	菊文・粘土目

第21図 国産陶磁器(1)



番号	出土地点	グリッド	層位	名称	器形	産地	口径	器高	底径	時期・年代	備考
1	6 壁	H-1 G	覆土	灰釉	丸皿	瀬戸・美濃	(11.8)	2.4	(7.0)	13C~15C*	
2	6 壁	H-6	覆土	灰釉	丸皿	瀬戸・美濃	(11.6)	(2.1)	-	13C~15C*	
3	2 住	J-2 0	1層~5層	灰釉	皿?	瀬戸・美濃	(10.4)	(2.1)	-	13C~15C*	小片(口縁部)
4	遺構外	I-17	A層	灰釉	丸皿	瀬戸・美濃	(10.2)	(1.8)	-	13C~15C*	
5	遺構外	I-14	A層	灰釉	丸皿	瀬戸・美濃	(11.8)	(2.7)	-	16C	小片(口縁部)
6	10 壁	H-18	覆土	灰釉	平鉢	瀬戸・美濃	(12.8)	(3.3)	-	13C~16C*	蓋片文
7	10 壁	H-18	覆土	灰釉	平鉢	瀬戸・美濃	(13.0)	(3.4)	-	13C~16C*	蓋片文
8	10 壁	H-18	覆土	灰釉	平鉢	瀬戸・美濃	(13.3)	(3.3)	-	13C~16C*	蓋片文
9	遺構外	J-13	A層	灰釉	皿	瀬戸・美濃	(9.6)	(1.6)	-	13C~15C*	
10	遺構外	J-16	A層	灰釉	丸皿?	瀬戸・美濃	-	(2.1)	-	16C~17C*	
11	1 壁	I-02	I層	灰釉	皿?	瀬戸・美濃	-	(2.2)	-	17C~19C	
12	遺構外	J-14	D層	灰釉	柄?	瀬戸・美濃	-	(1.5)	-	16C~17C*	小片(口縁部)
13	遺構外	I-19	D層	天目	柄?	瀬戸・美濃	-	(1.5)	-	17C~19C	小片(口縁部)
14	不明	不明	不明	灰釉	丸皿	瀬戸・美濃	-	(2.1)	-	13C~15C	小片(口縁部)
15	遺構外	I-09	I層	灰釉	皿?	瀬戸・美濃	-	(2.3)	-	17C~19C	小片(口縁部)
16	遺構外	I-09	I層	灰釉	丸皿?	瀬戸・美濃	-	(1.1)	-	16C~17C*	小片(口縁部)
17	遺構外	I-17	B層	灰釉	丸皿	瀬戸・美濃	-	(0.8)	(7.0)	13C~15C*	剪花文・小片(底部)
18	遺構外	J-13	I層	灰釉	皿?	瀬戸・美濃	-	(1.1)	(6.3)	17C~19C	胎土目。見込み裏面に髹
19	不明	不明	不明	灰釉	皿?	瀬戸・美濃	-	(1.8)	(7.0)	17C~19C	2次製熟
20	不明	不明	不明	灰釉	丸皿?	瀬戸・美濃	(1.3)	(5.4)	16C~17C*	胎土目。底部のみ残存	

第22図 国産陶磁器(2)



番号	出土地点	グリッド	層位	名称	器形	産地	口径	器高	底径	時代・年代	備考
1	1 住	I-7	I層	飯軸	丸蓋?	瀬戸・美濃	-	(1.5)	-	14C~17C前	小片(底部)
2	不明	不明	不明	飯軸	丸蓋?	瀬戸・美濃	-	(1.6)	-	14C~17C前	小片(底部)
3	遺構外	I-16	I層	飯軸	丸蓋?	瀬戸・美濃	-	(1.3)	(7.2)	14C~17C前	小片(底部)
4	遺構外	J-1.6	A層	灰輪	香炉	瀬戸・美濃	-	(1.6)	-	14C前	
5	遺構外	J-1.3	A層	志野	丸皿	瀬戸・美濃	-	(1.6)	4.4	14C前	砂目
6	遺構外	J-1.3	A層	志野	折縁皿	瀬戸・美濃	(14.4)	(2.9)	-	14C前	
7	不明	不明	不明	志野	折縁皿	瀬戸・美濃	-	(2.6)	-	14C前	
8	遺構外	I-1.2	B1層	志野	梅?	瀬戸・美濃	-	(1.7)	(5.4)	14C前~17C前	
9	遺構外	I-1.2	B1層	天目	茶碗	瀬戸・美濃	(9.6)	(5.1)	-	14C前	茶系鉄軸
10	遺構外	I-1.4	I層	天目	茶碗	瀬戸・美濃	-	(3.6)	-	14C前	
11	10 壁	H-1.8	層土	天目	茶碗	瀬戸・美濃	-	(2.3)	-	14C前	漆付器(漆で埋埋)。茶系鉄軸
12	遺構外	I-1.9	A層	鉄軸	折縁皿	瀬戸・美濃	(10.8)	(1.9)	-	14C前	小片(口縁部)
13	1 壁	I-0.2	床	天目	碗?	瀬戸・美濃	-	(2.0)	-	17C~19C	小片(口縁部)
14	遺構外	J-1.3	B1層	天目	茶碗	瀬戸・美濃	(11.2)	(5.4)	-	14C前	

第23図 国産陶磁器(3)

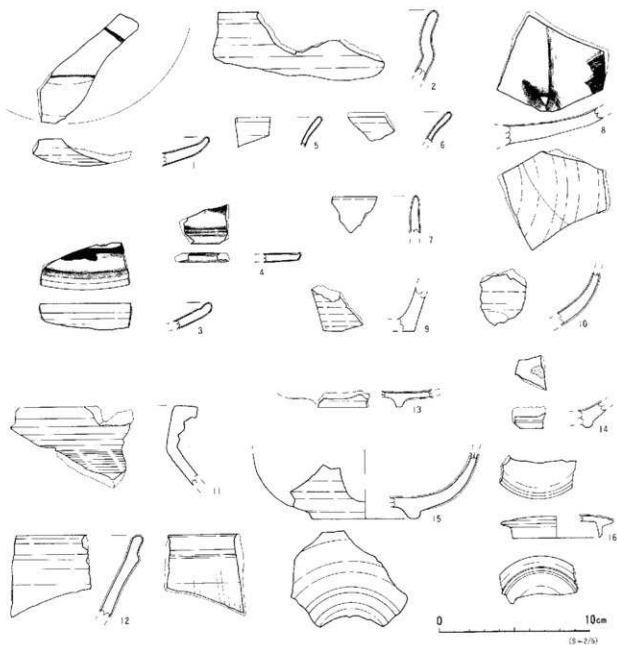
いる。9と10は口縁のくびれが小さく、胴部がほぼ直線的になる。

鉄軸折縁皿(第23図12)は、口縁部内面にヒダ状の削り出しを有する。

志野丸皿(第23図5)は、底部のみである。見込み部には、砂目を有する。

志野折縁皿(第23図6)は、口縁が折縁状を呈する、口径14cmほどの中皿である。

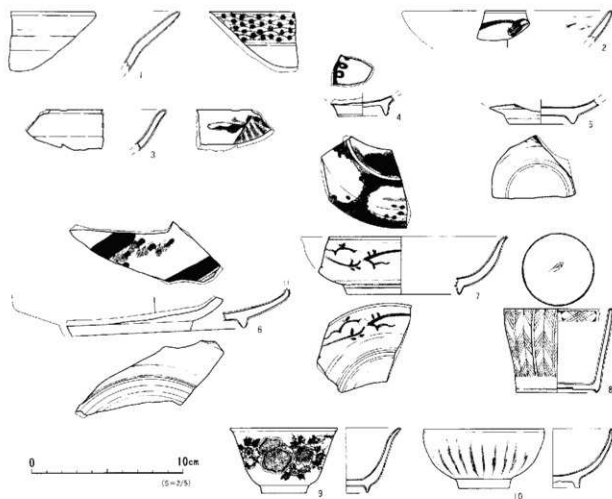
志野椀花皿(第23図7)は、推定口径も出せない程の小破片であるが、約1cm単位でへこみをつ



(9-2/3)

番号	出土地点	グリッス	層位	名称	器形	産地	口径	器高	底径	時期・年代	備考
1	遺構外	I-04	不明	灰釉	皿	唐津	-	(1.7)	-	17C	絵唐津、足込みに2本の縦線模様
2	遺構外	J-13	A層	灰釉	大鉢	唐津?	-	(4.7)	-	18C	
3	遺構外	I-17	A層	灰釉	皿	唐津	-	(1.8)	-	19C?	絵唐津
4	2 塚	I-14	覆土	灰釉	皿	唐津	-	(0.6)	-	19C?	絵唐津
5	遺構外	I-17	A層	灰釉	碗	唐津	-	(1.9)	-	19C?	胎土的に、6と同一個体?
6	遺構外	H-18	A層	灰釉	碗	唐津	-	(2.0)	-	19C?	胎土的に、8と同一個体?
7	遺構外	H-17	A層	灰釉	碗	唐津?	-	(2.4)	-	不明	胎土的に
8	遺構外	I-13	不明	灰釉	大皿	唐津	-	(2.9)	-	18C	絵唐津、足込みに文様有り
9	遺構外	I-12	B層	鉄釉	鉢?	唐津	-	(3.0)	-	18C	
10	遺構外	I-17	B層	灰釉	碗	不明	-	(3.4)	-	近代(19C)	胴部下半露出、地方産?
11	遺構外	I-14	B層	鉄釉	碗?	不明	-	(5.4)	-	近代?	
12	遺構外	I-14	I層	鉄釉	鉢鉢	不明	-	(5.4)	-	近代?	
13	遺構外	I-09	I層	灰釉	皿	不明	-	(1.1)	(5.6)	近代(19C)	地方産?
14	遺構外	I-04	不明	灰釉	皿	不明	-	(1.7)	-	近代?	砂目
15	遺構外	I-10	I層	灰釉	碗	東北地方?	-	(4.3)	(7.0)	近代(19C)	底部~高台部露出、地方産?
16	遺構外	H-17	A層	灰釉	皿	不明	1.76	1.4	下5.8	近代(19C)	土瓶の蓋

第24図 国産陶磁器(4)



番号	出土地点	グリッド	形状	名称	器形	産地	口径	器高	底径	時期・年代	備考
1	上段小穴	1-0.9	不明	染付	中皿	肥前	—	(3.5)	—	17C中~18C後	青森庶文
2	遺構外	1-0.9	1層	染付	椀	肥前	(11.4)	(2.0)	—	17C中~18C後	庶文
3	遺構外	3-1.2	1層	染付	椀?	肥前?	—	(2.6)	—	不明	破断を受け不明
4	1 土	1-0.8	雑土	染付	小皿	肥前	—	(1.3)	(1.7)	17C中~18C後	丸杖文の連続
5	遺構外	1-1.3	A層	染付	皿	肥前	—	(1.6)	(4.4)	17C中~18C後	外面無縁のみ
6	3 十	1-0.8	雑土	染付	鉢	肥前系	—	(2.3)	(12.0)	■8~10■11.8C	外面無縁、見込庶文
7	3 七	1-0.8	雑土	染付	皿	肥前系	(13.4)	3.8	7.2	■8~10■11.8C	外面無縁文、見込丸文
8	3 上	1-0.8	層上	染付	器口	肥前系	7.2	5.5	5.4	■8~10■11.9C	矢羽堀文
9	3 土	1-0.8	雑土	染付	小椀	肥前系	7.2	4.3	2.8	■8末~明治	扇短印刷
10	3 土	1-0.8	雑土	灰釉	小椀	瀬戸・美濃系	8.0	3.9	3.4	■8末~明治	蓮華文模倣

第25図 国産陶磁器(5)

けて、全体を花模様に見せるような皿であることがわかる。

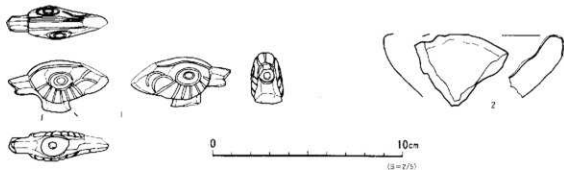
大窯Ⅲ~Ⅴ期 (第22図10、12、16、20、第23図1~3、8)

口縁部および底部の小破片である。器形および胎土や焼きの具合から大窯期と判断できるものである。

第22図10、12、16は、灰釉の口縁部小片である。器形は全て丸皿と判断したが、平椀になる可能性もある。底部破片は、第23図1~3の灰釉と第22図20の志野がある。灰釉は、全て丸皿になると推定される。第22図20の志野は、高台の高さから椀になると思われ、底面に胎土目が確認できる。

登窯期 (第22図11、13、15、18、19)

鉄釉が1点、灰釉が4点ある。明確ではないが、17世紀以降のものと考えられる。第23図13は、



番号	出土地点	グリッド	層位	名称	器形	産地	口径	器高	底径	胎土	備考
1	1 壺	1-0.2	B層	鉄鉢	水溜	不明	長5.3	(2.7)	幅1.7	焼	穿孔(口部と首部をつなぐ)
2	遺構外	H 1.8	A層	—	甲冑	—	9.0	(3.3)		焼灰	内面赤褐色の粘着状付着

第26図 水滴・増塙

鉄軸碗になると思われる。内面は口縁部上位だけに施軸される。第23図18と19は、灰軸皿になると思われる。見込部が露胎になっているが、その部分にも軸がけされている。

唐津 (第24図1～9)

肥前唐津系の陶磁器は9点出土した。年代が明確なものはないが、文様や器形から17世紀～18世紀の間に推定できるものが多い。第24図1、3、4、8は鉄絵皿である。同図2は灰軸大鉢である。同図9は鉄軸鉢である。同図5～7は灰軸碗である。

染付 (第25図1～5)

肥前系染付は5点出土した。染付模様や器形から時期を判断すると、肥前Ⅲ～Ⅳ期に含まれる。器種は碗と皿がある。第25図2は、内外面に波の様な模様が描かれている。同図3は、二次的な被熱を受けて詳細は不明である。同図4は、丸状の様子が連なる小皿である。同図1は、外面に界線を二重に施し、内面には青海波文が描かれる。同図5は、界線のみ確認できる底部破片である。

近代陶磁器 (第25図6～10)

総数約60点程出土しているが、そのほとんどの約50点あまりが第3号土坑から出土している。第3号土坑出土のものは、同一器種が多く一括廃棄されたものと考えられる。これらの近代陶磁器は、時期的に、幕末から明治にかけての肥前Ⅴ期にあたる。すべてを掲載できないため、特徴ある小杯、皿、鉢、そば猪口の器種を選別掲載する。

第25図9と10の小杯のうち、同図9は草花文に「福」瓢箪を描いた染付である。同図10は、中国蓮弁文碗を模倣した灰軸である。同図7は、外面界線、見込は丸文に丸点模様が描かれる皿である。同図6は、外面界線のみ、見込みには松を型どった模様が描かれる鉢である。同図8と10はそば猪口で、8は、外面に矢羽根文が描かれる。10は、蛇の目回高台のものである。

産地不明陶磁器 (第24図10～16)

地方窯で製作された可能性があるが、産地同定できないものである。8点出土した。器種には、第24図10と15の碗、同図13、14の皿、同図11の壺形製品、同図12の挿鉢、同図16の蓋がある。それぞれ年代についても判然としないが、近代の可能性はある。

第26図1は、第1号壑穴建物跡埋土から出土した水滴である。器形は、鳥を形どったもので首の部分から体部は欠失している。穿孔は、首の部分から嘴まで貫通されている。現存する頭部は、削りだしの手法で表現されている。色調は黒中心とし、全体に鉄軸を施軸しているが、目の下の刻線部分

には透明軸を施軸し、目の部分は軸剥ぎされている。産地および年代については不明である。同図2は、破片で全体形は不明であるが増埒と思われるものである。器厚は1.5cm程度で、砂粒を含む粘土で作られており胎土は発泡している。口縁は自然軸で発色しており、内面には赤褐色の溶着物と思われるものが付着している。(新山)

第2節 鉄・銅製品 (第27図～第29図)

伝法寺館跡から出土した鉄・銅製品は総数約60点である。器種は多様であり、機能的にみると武器、武具、建築用具、生活用具等に大別できる。中でも多く出土したものは、建築用具であり、鉄釘が特に多い。以下、器種別に特徴を中心に述べる。

鋸 (第27図1)

第7号竪穴建物跡の底面から出土した。ほぼ完形で全長は約40cmである。刃部長約25cm、刃部幅は柄の付近で最大3cmである。切先は細身の刀剣状であり、鋸目は交互につくられている。柄の部分には木質部分も残存しており、柄と刃の境目は鉄輪状の止め具で締められている。

小 札 (第27図2～6)

6点出土した。1点を除き、ほかは遺構の埋土から出土している。形態は、頭部が斜めに切られたもの第27図2と3、頭部中央が半円形状にくびれるもの同図に分けられる。頭部中央がくびれるものは、7個2列の穿孔がみられるが、頭部が斜めに切られたものは、長辺7個、短辺6個の穿孔である。また、第27図2は漆が塗布されている。

刀 子 (第27図9)

第8号竪穴建物跡の埋土から1点出土した。切先部分を破損しているが、細身で小型のものである。片間で、刃は平造りで推定10cm程度、茎部が5～6cmである。

鉄鍔類 (第27図8、10、11)

第8号と第10号竪穴建物跡の埋土から出土している。第27図8は先端部だけの破損品である。同図10は、篋被が偏平で鍔身は、最大幅1.5cmの両丸造りである。同図11は篋被がほぼ円形の断面で、鍔身は鍔造りである。同図10のものに比べ、鍔身は厚く、頸部から先端に向かい鋭利である。両鉄鍔共に折れている可能性はあるが、茎部は短く鍔身とほぼ同じ長さである。

槍状鉄製品 (第27図12)

第6号竪穴建物跡の埋土から出土している。破損品であるが、槍先状で一方の面が山形の稜をもつ片平鍔造りである。断面形は二等辺三角形である。全長は明らかではないが、現存の長さは約7cm、幅は最大幅で2cm弱である。槍鉋先端部の可能性もある。

銅金具 (第27図13)

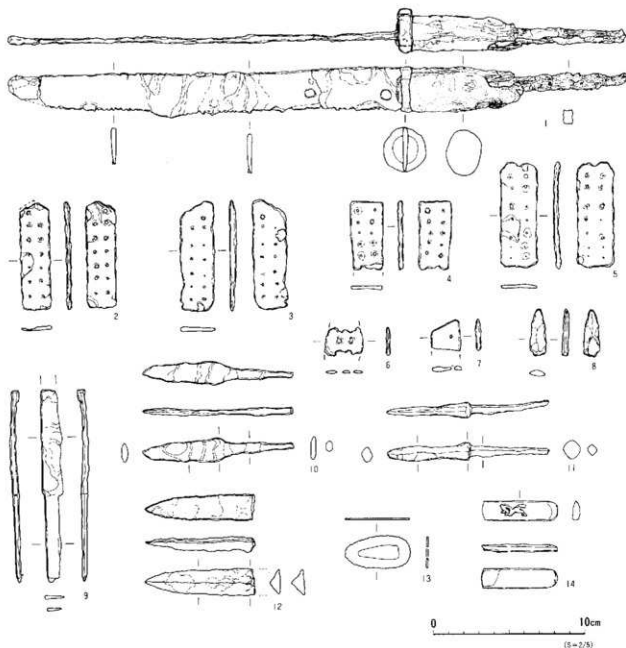
第11号竪穴建物跡の埋土から出土している。青銅製で、外形は細かい刻目が入られている。

小 柄 (第27図14)

遺構外から銅製の小柄が1点出土した。中央部には、獅子と思われる絵柄が浮き彫りされている。

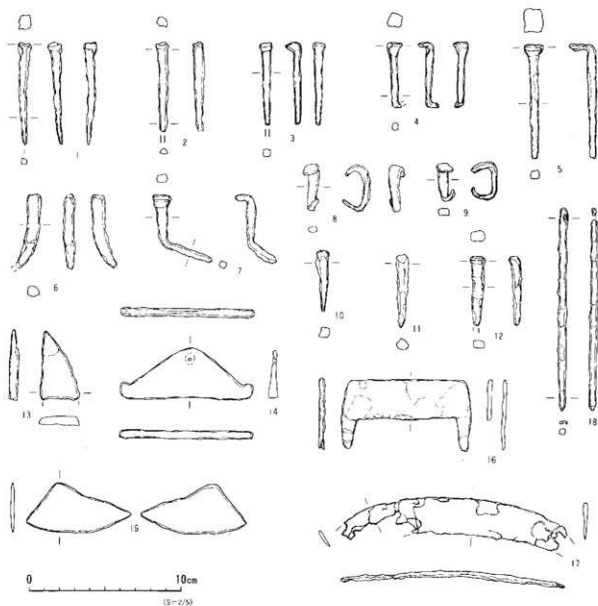
釘 (第28図1～12)

観察表に記した各遺構の埋土および遺構外から総数12点出土した。腐食により角が落ちているも



番号	出土地点	グリッド	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
1	7 壁	I-18	床	鉞	40.5	2.9	2.9	大首部分残存
2	2 土	I-10	1 層	小札	7.1	2.0	0.5	うるし塗付、刃部斜めに切断
3	遺構外	I-19	木 組	小札	7.3	2.3	0.5	刃部斜めに切断
4	2 壁	I-14	焼土直上	小札	4.6	2.2	0.3	下部破損
5	6 壁	H-15	覆 土	小札	7.0	2.3	0.3	刃部中央くびれ
6	2 土	I-10	覆 土	小札	2.5	1.9	0.2	刃部、下部破損
7	2 土	I-10	覆 土	小札	2.0	2.0	0.3	刃部のみ
8	10 壁	H-18	覆 土	尖頭状鉄製品	3.1	1.2	0.4	鉄槌?
9	8 壁	H-18	覆 土	刀子?	12.5	1.9	0.6	
10	10 壁	H-18	焼土上	鉄 鍔	9.8	1.7	0.5	
11	遺構外	H-08	不 明	鉄 鍔	10.6	1.2	1.1	
12	6 壁	H-15	覆 土	槍 先?	7.3	1.9	0.9	槍ガンナ?
13	11 土	I-09	覆 土	鈔金具	4.3	2.2	0.1	鈔製品
14	遺構外	H-19	不 明	小 柄	5.0	1.3	0.5	鈔製品、錐文字?

第27図 鉄製品(1)



番号	出土地点	グリッド	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
1	2 壱	I-14	純土面上	釘	6.7	0.9	0.9	ほぼまっすぐ
2	10 壱	H-18	礫土	釘	5.9	0.8	0.7	ほぼまっすぐ
3	10 壱	H-18	礫土	釘	5.4	1.1	1.0	ほぼまっすぐ
4	10 壱	H-18	礫土	釘	4.4	1.0	1.0	S字状
5	6 壱	H-15	礫土	釘	7.7	1.3	1.6	ほぼまっすぐ
6	2 住	I-20	カマド	釘	4.8	0.9	0.7	折れ曲がり
7	6 壱	H-15	礫土	釘	4.5	1.2	1.2	折れ曲がり
8	10 壱	H-18	礫土	釘	3.2	1.0	0.4	U字状
9	13 壱	J-19	礫土	釘	2.5	1.1	0.5	U字状
10	遺構外	J-19	A土	釘	4.2	0.9	0.7	ほぼまっすぐ
11	遺構外	J-19	A土	釘	4.7	0.7	0.7	ほぼまっすぐ
12	遺構外	I-09	I層	釘	4.5	1.0	0.7	ほぼまっすぐ
13	遺構外	H-18	B層	火打金	4.6	2.6	0.6	三角状
14	4 土	I-10	礫土	火打金	8.8	3.4	0.6	三角状、穿孔あり
15	6 壱	H-15	礫土	火打金?	6.9	3.3	0.3	三角状
16	1 土	I-03	礫土	平引金	8.6	4.7	0.3	金属部ほぼ完了
17	遺構外	I-08	C層	鎌	14.9	2.2	0.5	
18	10 壱	H-18	礫土	針	13.4	0.6	0.5	両棘車軸?

第28図 鉄製品(2)

のもあるが、断面がほぼ四角形の角釘である。長さは6cm前後（約2寸）のものと同4～5cm（約1寸5分）のもの、3cm前後（1寸）の短釘がある。一番長いものでも8cm弱である。釘頭部はL字状である。形状は様々で、ほぼまっすぐな状態のもの（1～3、5、10～12）、途中から折れ曲がったもの（4、6、7）、両端が曲線状に曲げられ、U字形のもの（8、9）がある。同図8と9は釘ではない可能性もあるが、断面形およびL字形の頭部と先すばまりの形状から含めた。何らかの物と固定しないしは締めるため曲げられているものと考えられる。

火打金（第28図13～15）

3点出土している。第28図14は完形である。全体形は、ほぼ三角状の山形で、両端が少しくびれる。山形頂部には1個の穿孔がなされ、孔には紐を通して使用していたものと考えられている。他の2点は、破損品と思われるが明らかではない。

芋引金（第28図16）

第1号竪穴建物跡の埋土から出土している。木質部は残っていないが、刃部は完形である。擦り出す部分の長さが8cm弱である。両端の装着柄は三角形で、長さは2cmほどである。

鎌状鉄製品（第28図17）

遺構外から出土している。緩やかな曲線を描く形状と、刃部の厚さが曲線内側に向かって細くなっていることから鎌状としたが、柄の部分や柄のつなぎ目など、明らかでない部分が多い。

針（第28図18）

第10号竪穴建物跡の埋土から出土している。長さは約13.5cmで、断面はほぼ四角形で5mmほどの厚さある。先端部片側に穿孔があり、穿孔をしている反対側の先端部はやや尖ってはいるが、破損している可能性がある。釐針程の大きさはあるが、紡錘車の軸の可能性もあり、用途は明言できない。

鉄鍋（第29図1～3）

鉄鍋と思われる破片は3点出土した。第29図1は、外側にL字状の折り返しのある口縁部破片である。同図3は、底部で円錐状の脚がつく破片である。推定底径が25cm程のものである。同図2は、厚さ3mm程の鉄片であるが、湾曲の状態から鉄鍋の可能性はある。いずれも接合には至らなかった。

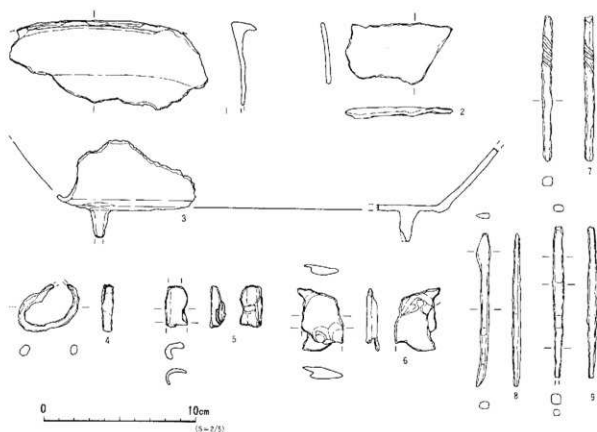
環状鉄製品（第29図4～6）

第10号竪穴建物跡の埋土と第2号土坑から出土した。同図4は、幅と厚さが約5mm程の鉄の棒が環状に曲げられている。同図5は幅約15mm、厚さ約5mmの板状のものが曲げられている。これらは、第27図1の鋸の柄の部分にみられるような、何らかの止め具として用いられた可能性がある。同図6も5と同様に鉄板がまげられているものであるが、薄さから止め金具というより、飾り金具であった可能性がある。

棒状鉄製品（第29図7～9）

いずれも断面形が四角形である。同図7は、破損しているものと思われ、現存する端部の3分1程の部分が、ねじられている。器種については不明である。同図8は、棒の先端部片側2cm余りを平たく潰された状態にある。鉄族の茎部の可能性もある。同図9は、直線的なもので破損しているものと思われる。用途は不明である。

（新山）



番号	出土地点	グリッド	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
1	遺構外	J-13	B ₁ 層	鉄鍔片	13.1	5.9	1.7	鉄鍔口縁部
2	遺構外	I-08	F ₁ 層	鉄鍔片	7.0	4.2	0.2	鉄鍔部か底部
3	遺構外	J-13	B ₁ 層	鉄鍔片	9.6	2.7	2.4	脚部残存
4	10 型	H-18	層 ±	棒状鉄製品	3.1	4.1	0.7	工具等の止め具?
5	2 土	I-10	層 ±	不明	2.7	1.4	1.1	
6	2 土	I-10	層 ±	不明	2.1	2.0	0.9	
7	1 土	I-03	層 ±	不明	9.5	0.7	0.7	ねじれ有り
8	遺構外	H-18	B ₁ 層	棒状鉄製品	10.1	0.9	0.6	平たい部分有り
9	12 型	J-19	層 ±	棒状鉄製品	9.8	0.8	0.7	ほぼまっすぐ

第29図 鉄製品(3)

第3節 銭貨(第30図、第31図)

銭貨は総数38点出土した。出土地点は、遺構内外の堆積土からで、遺構床面からの出土はなかった。出土状況はまばらではあったが、中には重なった状態で出土したのも数点ある。

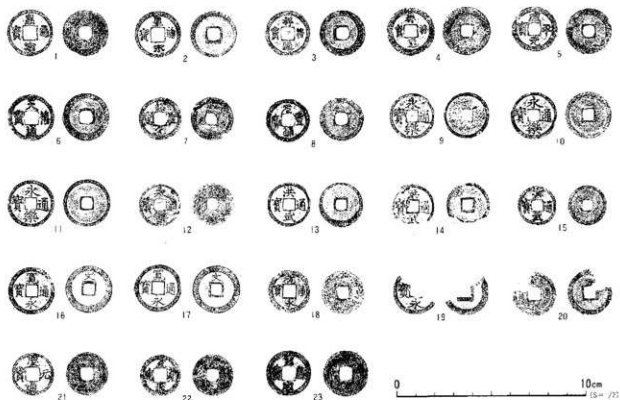
出土銭貨を大まかに分類すると、初鋳年が10～11世紀の宋銭(北宋)、同じく14～15世紀の明銭、17世紀以降の寛永通宝、時期不明の無文銭に大別できる。

初鋳年が10～11世紀の宋銭とされる渡来銭は、全部で8点出土した(第30図-1～8)。初鋳年が最も古いとされるのが咸平元宝で、最も新しいとされるのが紹聖元宝である。大きさは、直径22mm以上24mm未満のものが2点、直径24mm以上のものが5点、外輪厚1mm以上のものが6点見られる。重さは、2g以上3g未満のものが5点、3g以上のものが2点である。

初鋳年が14～15世紀の明銭とされる渡来銭は、全部で7点出土した(第30図-9～15)。出土品は、永楽通宝、洪武通宝の2種類である。大きさは、直径24mm以上のものが3点(永楽通宝3)、外輪厚

1mm以上のものが4点(永楽通宝2・洪武通宝2)見られる。重さは、3g以上のものが3点(永楽通宝2・洪武通宝1)である。

上述した渡来銭の内、精銭であるか模倣銭であるかの判断は難しいが、直径や外輪厚、重さなどだけで判断すると精銭も何点かは含まれていると思われる。



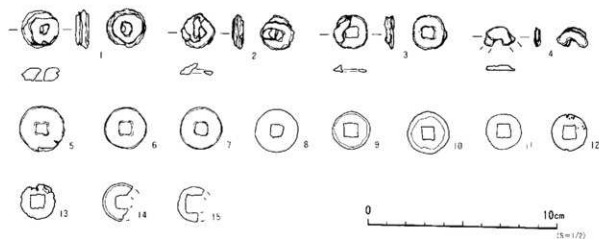
番号	品目	記号地点	グリッス	層位	直径 (cm)	重さ (g)	外輪幅 (cm)	外輪厚 (cm)	備 考	参照年代
1	皇宋通宝	1 十	1 0 3	5層	24.6	3.4	1.8	1.2		宋銭(1039)
2	皇宋通宝	排上	不明	不明	24.5	2.8	2.2	1.1		宋銭(1039)
3	皇祐通宝	1 上	1-0 3	5層	24.5	11.8	2.5	0.9	4点重なり	宋銭(1095)
4	祥符通宝	遺跡外	1-1 3	B層	25.5	3.8	3.5	1.1		宋銭(1099)
5	咸平元宝	1 土	1-0 3	5層	24.3	2.6	3.1	1.0		宋銭(998)
6	天禧通宝	1 土	1-0 3	5層	25.0	2.8	2.4	1.0		宋銭(1017)
7	紹聖元宝	1 土	1-0 3	不明	22.8	3.0	2.5	1.2		宋銭(1094)
8	元豊通宝	遺跡外	H-1 8	A層	23.5	2.3	2.8	1.3		宋銭(1078)
9	永楽通宝	1 土	1 0 3	5層	24.2	2.6	2.1	1.1		明銭(1408)
10	永楽通宝	1 土	1-0 3	不明	24.9	3.0	2.1	0.9		明銭(1408)
11	永楽通宝	遺跡外	H 1 9	C層	24.9	3.1	2.1	1.2		明銭(1405)
12	永〇〇宝	遺跡外	1-1 5	不明	22.2	1.1	1.1	0.3	永楽通宝?	明銭?
13	洪武通宝	不明	不明	不明	23.5	3.0	2.9	1.4		明銭(1368)
14	洪武通宝	不明	不明	不明	(23.5)	2.9	1.5	1.5	下部欠損	明銭(1368)
15	洪武通宝	遺跡外	H-1 8	不明	20.6	1.9	1.7	0.9		明銭(1368)
16	寛永通宝	遺跡外	1-1 9	不明	25.1	3.0	2.6	1.2	背面に「文」	近世
17	寛永通宝	遺跡外	1-1 2	B層	25.2	3.2	2.5	1.1	背面に「文」	近世
18	寛永通宝	遺跡外	1-0 9	B層	22.8	2.3	2.7	1.1		近世
19	〇永〇宝	遺跡外	H-1 9	A層		(1.7)	2.2	1.4	半銭、寛永通宝?	近世
20	寛永通宝	遺跡外	1-1 9	A層	23.4	2.3	1.9	0.9	1/4輪	近世
21	慶元通宝	遺跡外	H-1 8	不明	22.2	2.0	1.6	0.8	背割製	不明
22	不明	1 土	1-0 3	5層	21.6	2.5	2.5	1.0	4文字入り	不明
23	不明	1 土	1-0 3	5層	23.9	3.1	2.6	1.1	4文字入り	不明

第30図 銭貨(1)

寛永通宝は、合計5点出土した(第30図-16~18)。大きさは、直径25mm以上、重さが3g以上のものが2点出土しているが、この2点の背面には「文」の字が刻まれている(第30図-16、17)。その他のものは、直径23mm前後、重さも2g余りである。

無文銭は、全部で14点と数多く出土した(第31図1~4、11~15)。かなり粗末なつくりで、外輪はなく、厚さは1mm以下のものがほとんどである。大きさは、20mm以下のものが多く出土した。20mmを超えるものは、5点のみであったが、大きさからして元々は文字が刻まれていた銭貨であり、風化により文字や外輪が見えなくなった可能性も考えられる(第31図-5~10)。また、重なり合って出土した例が4点(第31図-1~4)あり、無文銭の用途を探る手がかりになり得るものである。

(新山)

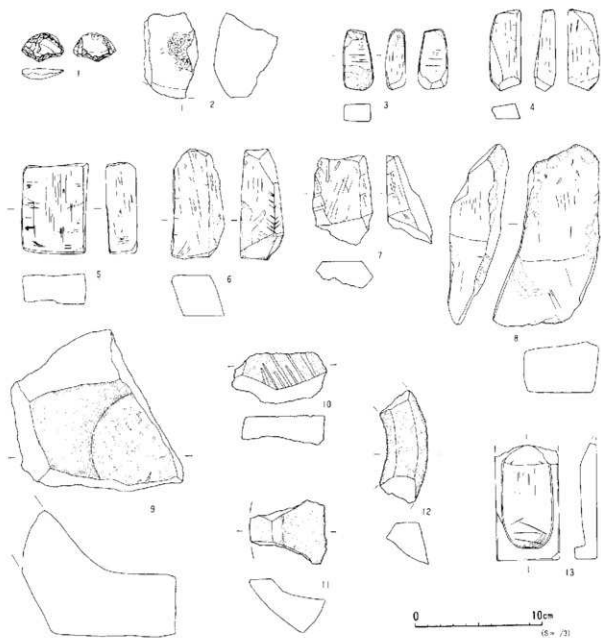


番号	品目	出土地点	グリッド	露位	直径 (cm)	重さ (g)	外輪幅 (cm)	外輪厚 (cm)	備考	初録年代
1	無文銭	10 壁	H-18	覆土	19.8	3.6	—	6.8	6~7枚の重なり	不明
2	無文銭	10 壁	H-18	覆土	17.5	0.8	—	4.8	2~3枚の重なり	不明
3	無文銭	10 壁	H-18	覆土	17.1	1.1	—	6.1	3~5枚の重なり	不明
4	無文銭	10 壁	H-18	覆土	17.3	17.3 (0.3)	—	4.7	2~3枚の重なり	不明
5	不明	2 壁	I-14	覆土	24.3	2.4	—	1.8	鉄製	不明
6	不明	8 壁	H-18	覆土	21.5	2.3	—	0.8	無文・無名銭?	不明
7	不明	10 壁	H-18	覆土	21.6	1.7	—	0.8	無文・無名銭?	不明
8	不明	2 土	I-08	覆土	22.1	1.6	—	0.9	無文・無名銭?	不明
9	不明	8 壁	H-18	覆土	19.3	0.9	—	0.7	無文・無名銭?	不明
10	不明	遺構外	H	不明	21.8	1.3	—	0.7	無文・無名銭?	不明
11	無文銭	遺構外	H-19	不明	17.7	0.6	—	0.7		不明
12	無文銭	10 壁	H-18	覆土	19.2	0.6	—	0.7		不明
13	無文銭	10 壁	H-18	覆土	18.4	0.4	—	0.7		不明
14	無文銭	遺構外	H-18	不明	19.7	(0.4)	—	0.8	半環	不明
15	無文銭	遺構外	H-19	不明	18.1	(0.3)	—	0.8	半環	不明

第31図 銭貨(2)

第4節 石器・石製品

出土した石器と石製品類の総数は34点である。これらには、縄文時代に比定される剥片石器と剥片、磨製石斧や鍬石が数点あるほか、館跡の時期に帰属する石製品類がある。出土位置は、遺構底面から出土しているもののほか、大半が遺構の埋土に混在して出土している。遺構外のもの、ほとんどが下段の平場の第A層からの出土である。以下に、素材と形態および使用痕跡から器種ごとに分類し、遺構内出土と遺構外出土に分けて石器類の特徴を述べる。



番号	出土地点	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考
1	10 壁穴	埋土	削器・接器 I	23	34	9	6.7	黒曜石	
2	3 土	埋土	礫石	(43)	(69)	(50)	153.8	流紋岩	
3	6 壁穴	埋土	礫石	49	23	15	22.4	細粒凝灰岩	
4	6 土	埋土	礫石	64	25	17	30.8	細粒凝灰岩	
5	6 壁穴	埋土	礫石	72	53	24	147.6	細粒凝灰岩	
6	6 壁穴	埋土	礫石	87	42	34	127.6	細粒凝灰岩	
7	16 I	埋土	礫石	71	47	35	82.5	細粒凝灰岩	
8	6 壁穴	埋土	礫石	143	85	45	465.6	細粒凝灰岩	
9	2 土	底面	石鉢	(127)	(137)	(114)	1200.0	安山岩	
10	5 壁穴	埋土	石臼	(40)	(75)	(31)	56.5	安山岩	
11	6 壁穴	埋土	石臼	(49)	(63)	(31)	60.1	安山岩	
12	8 壁穴	埋土	石臼	(89)	(38)	(33)	99.5	安山岩	
13	8 壁穴	床面	硯	(90)	50	18	129.8	頁岩	

第32図 遺構内出土石器類(1)

剥片石器・剥片（第32図1、第34図1）

第32図1は、第10号竪穴建物跡の埋土から出土した。素材は黒曜石で一部に表皮を残すが、両面の周縁部に剥離調整が施される。刃部には顕著な潰れがみられ、削器ないし掻器として使われたものと思われる。第34図1は珪質頁岩の剥片で、不規則で粗い割れ方である。このほかに、採録しなかった剥片が2点ある。

磨製石斧（第34図2）砂岩を素材とするもので、刃部を欠損する。

敲石（第32図2）第3号土坑から出土した。破損品で全体形は不明だが、礫の器面のほぼ中央に浅い敲打痕を持つ。素材は流紋岩である。

石製品類（第32図3～13、第33図、第34図）器種には、砥石、石臼、石鉢、硯、台石がある。

砥石（第32図3～8、第32図3～9）

遺構内から8点、遺構外から7点の総数15点が出土した。形態的には、断面長方形ないし方形であるが、破損品を含め全体的に規格性はみられない。素材の切断面が良好に残っているものは少なく、僅かに第32図3の端部にタガネの痕跡がみられる。第34図9は形状も整っており、端部に鋸引きの痕跡が残っていることから近世の所産のものと思われる。その他のものは、小型のものから大型のものまで、全面が使用されている。第32図8や第34図6は、使用により大きく湾曲している。また、第34図9を除き、他すべての砥石の面や角の部分に鋭利なもので削り込まれたような、刻みや線状痕がみられる。石質には、中砥ぎや仕上げ砥ぎとして使用される細粒凝灰岩が多いが、砂岩や軽石製のものもある。

石臼（第32図10～12、第33図1、2、第35図1～3）

遺構内から5点、遺構外から3点の総数9点が出土した。全て破損している。石材はすべて安山岩である。これらは、形態的特徴から茶臼と粉挽き臼に分けられる。第32図11と12は茶臼の下臼の縁の部分である。第35図3は破損しているが法量から茶臼の上臼である可能性がある。側面に菱形の裝飾が浮き彫りされている。中央部には深さ3.2cmの挽き木孔を持つ。磨り面は平滑になるが、臼の目は周縁まで達していない。粉挽き臼は、第2号竪穴住居跡堆積土から出土した1点（第13図5）を含め6点ある。第35図1は、8分画6溝になる目が周縁にまで達する。回転方向は時計回しである。第33図2は上臼で、器体にノミまたはタガネで成形された痕跡を残す。磨り面の目は区分けされるわけでもなく、深い目の溝が3本程刻まれる。また、副溝の機能を果たすのか、主溝と交差する弧状の浅い溝がある。回転方向は不明である。第35図2も上臼で器体に直径約3cmの孔を持つ。欠損が著しいため磨面の状態は不明である。第32図10は大部分を欠損し副溝のみが残存する。回転方向は反時計回りである。第35図1は8区画6分割の目を持つが、副溝は摩滅し浅くなっている。器体のほぼ中央部には、芯受けと考えられる直径約2cmの孔を持つ。回転方向は不明である。

石鉢（第32図9）第2号土坑の底面から出土した。底部の破損品で全体の4分の1程しか残存していない。器厚は5cmほどあり法量的には大型であったものと思われる。石質は安山岩である。

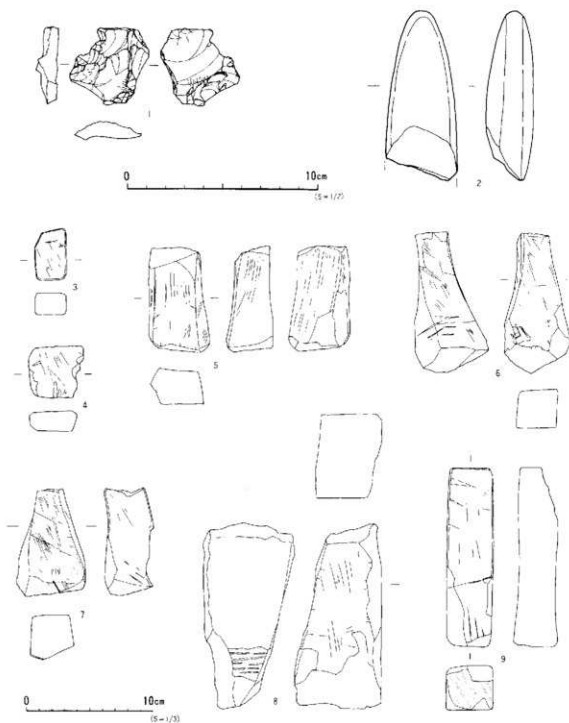
硯（第32図13）第8号竪穴建物跡の底面から出土した。小型の硯で、墨受けの部分が破損している。石材は頁岩である。

台石（第33図3、4）第3号竪穴建物跡底面と第2号土坑から出土している。いずれも石材は軽石で、素材の両面を平坦にしたうえで、片面に直径約10cm、深さ3cmから4cmの凹みを掘り込



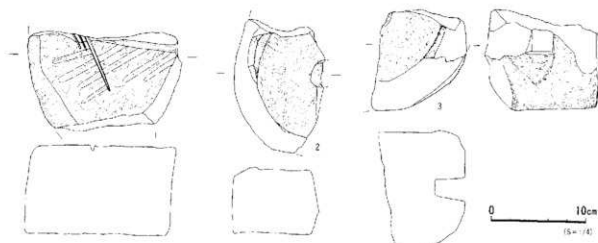
番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	7号穴	覆土	石片	(255)	(156)	125	4680.0	安山岩	S-1
2	8号穴	覆土	石臼	(163)	(66)	(73)	518.1	安山岩	
3	8号穴	底面	その他	200	112	120	1330.0	軽石	
4	2土	覆土	その他	152	216	154	1430.0	軽石	

第33図 遺構内出土石器類(2)



番号	出土地点	部位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	備考
1	I-17	A層	刮片	41	42	12	13.7	珸質頁岩	
2	I-19	不明	磨製石斧	(90)	38	25	110.1	砂岩	
3	H-18	不明	砥石	41	25	18	6.8	砥石	
4	I-8	I	砥石	39	14	17	40.1	砂岩	
5	I-18	A層	砥石	83	48	38	149.4	細粒凝灰岩	
6	不明		砥石	111	52	39	325.9	粗粒凝灰岩	
7	I-13	I	砥石	84	55	39	208.2	粗粒凝灰岩	
8	I-14	I	砥石	145	69	72	763.7	粗粒凝灰岩	
9	J-16	A層	砥石	130	27	35	259.5	細粒凝灰岩	

第34図 遺構外出土石器類(1)



番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	H-17	A層	石臼	(115)	(163)	94	2180.0	安山岩	
2	J-13	i	石臼	(108)	(100)	(120)	1380.0	安山岩	
3	H-15	A層	石臼	(140)	(94)	(70)	935.3	安山岩	

第35図 遺構外出土石器類(2)

んでいる。特異なことは、この凹の周囲は黒く焼け焦げていることである。軟質な石材から礎石としての使用は考え難く、焦げていることから、鍛冶又は火に関連したもので使用されたものではないかと考えられる。(小山)

第5節 その他の遺物 (第13図6～10)

上記の第1節から第4節までの城館期および近世の遺物のほかに、平安時代の土師器、須恵器や縄文土器も数点出土している。土師器は、調査区内から他の遺物と混在して出土しているが、堅穴住居跡の節で図示した以外は、すべて細片で図示できるものはない。全体的に甕の破片が多く、坏はほとんど出土していない。須恵器は、第13図6～10のほか総数9点が出土した。すべて外面調整にタタキ目の胴部破片で、器種は特定できない。このほかに、掲載しないが縄文中期の榎林式に比定される土器が数点出土している。(新山)

第4章 「伝法寺館跡」の縄張りについて

小山 彦 逸

はじめに

伝法寺館跡は、十和田市中心街から南東約7km、国道4号線沿いの伝法寺集落の北端に位置する。館跡は北北東に突き出た舌状台地の先端を利用したもので、南西部が台地続きとなっているほかは、深い谷に囲まれ、南南西から北北東に向かって奥入瀬の支流が流れており、標高40mの台地に構築されている。

昭和38年、国道4号線を作る際に「津村館跡」(I曲輪)の西側部分が破壊されてしまっている。

歴史的背景

伝承などによれば承久元年(1219)に、日の宮中務大夫が伝法寺館跡に居住したが、翌二年(1220)、南部氏のお供をして甲斐から鎌部に下向した「家の子」の一人である津村越後がこの館跡に入ったという。その時に、津村越後が伝法寺館跡の本丸に入り、日の宮氏は二の丸に移ったとも伝えられる。そのようなことから、本丸を「津村館」、二の丸を「日の宮館」とも呼称している。

天正十九年(1591)に起こった「九戸政実の乱」の時には、七戸城主家国によって伝法寺館跡が急襲されたが、津村伝右衛門が防戦し、結局この館跡を落とすことができなかったようである。

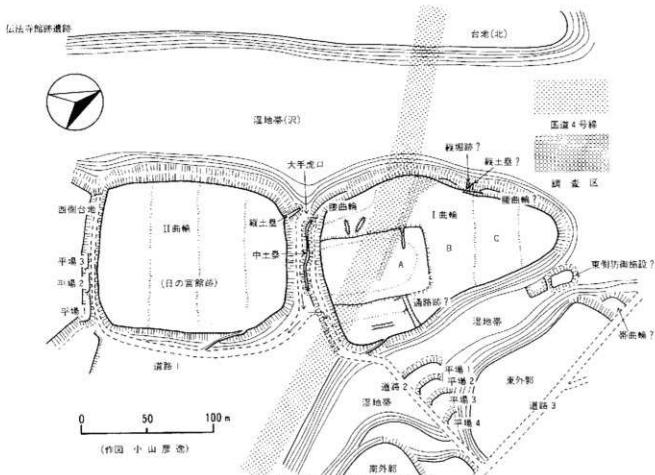
また、慶長三年(1598)の「館持支配帳」には、「伝法寺 四百石 津村伝右衛門」とも見られる。永慶軍記によれば「九戸党七戸彦三郎家国又同夜(三月十三日)五百人の一隊を率いて伝法寺右衛門を伝法寺に襲う。城主右衛門之を偵知し、防備を設けて敵を待つ。家国城中寂として声なきを窺ひ喜んで兵を揮き・火を照らして城に迫る。・に於いて城中矢丸雨発し敵の死傷算をなし家国の兵乱る。伝右衛門之を見、門を開きて突撃し、家国身を以て・る。」とある。

館跡の縄張り

伝法寺館跡の縄張り構造は、第36図で示すとおりである。図示表現方法は現存している遺構を実線で表現し、不明部分については点線で表現した。

まずこの伝法寺館跡の中心部分であるが、それはI曲輪とした通称「津村館跡」と呼称されるものである。このI曲輪北側の西側部分には、大手虎口を睨むように腰曲輪が設けられている。また、北側の中央部よりやや東側寄りには縦堀と思われる遺構と、縦土塁状の遺構が並行する形で設けられている。この縦堀と縦土塁が設けられている部分はI曲輪のBとCとした若干低くなる境部分に設けられている。南側の斜面は現在でも土砂崩れの痕跡がうかがえるが、城館としてはあまり手を加えられていないようである。I曲輪のAとした部分は明瞭な段が作られ、立ち上がりというほどにはなっていない、緩い勾配でおおよそ90cmほど高くなっている。おそらくこのI曲輪A部分が城館としては非常に重要な場所であったと考えられる。また、I曲輪A部分の南側には、通路跡と思われる窪みも現存している。

次に、I曲輪の西側にはII曲輪が存在している。I曲輪とII曲輪の間は自然の沢地に手を加えた堀跡が存在している。I曲輪とII曲輪の堀幅はおおよそ17mほどである。その堀跡には中土塁が設けられている。中土塁の現高は1.7mほどで、全長は50mほどであるが、南側に進むにしたがい自然に途切れる形をしている。この中土塁は意図的に屈曲を持たせ、I曲輪の腰曲輪のような役割を担ってい



第36図 伝法寺館縄張り図

るものと考えられる。そして中土塁が切れた所から、単純な空堀となっていくようであるが、国道4号線建設工事部分にかかるために不明である。中土塁の西側部分は堀底道のような通路として使われていたものと思われる。そのためか、II曲輪の東側壁面はきれいに切り落とされ、大手虎口を塞ぐように縦土塁状の遺構を意識的に北東側に迫り出させ、通路部分を塞ぐように作っている。

II曲輪の北側斜面は、急峻に切り落として作っているようである。また、II曲輪西側の北側部分は一部堀跡が残存しており、中世段階のものと思われる。その他の堀跡と思われる部分は現在農道が通され不明な部分もあるが、おおむね現在の道路幅が堀跡であったと思われる。II曲輪の西側台地の南側には、南側から入って来る人を監視するための平場が作られている。そしてその平場は、順々に高くなり、中腹段階で見られなくなる。また、II曲輪南側の西側部分に平場1と対応する箇所小さな平場があるが、遺構であるかどうかの判断はできなかった。

次に、I曲輪とII曲輪の間を通り抜けると「道路2」に至る。「道路2」は南東側に延びており、当時存在していたかどうかは不明であるが、道路2を行くと右側に70cmほどの高さをもつ平場が4段設けられ、意識的に中世段階に作られていた可能性が考えられる。さらに「道路2」はそのまま進んで行くと、南外郭と東外郭に挟まれる形となっている。そして突き進むとT字路にぶつかり、ぶつかった道路が「道路3」となり、田街道ではないかと考えられる。

もうひとつ大きな特徴は、I曲輪と東外郭の間の沢部分には、意識的にその真中に土手状の施設遺構が作られている。この土手状施設は伝法寺館跡の弱点である東側からの侵入に対する守りのための施設であるということが出来る。さらにその土手状施設の西側には屋敷跡と思われるような窪地がみられるが、後世のものである可能性も考えられる。

考 察

伝法寺館跡の縄張り調査を通して言えることは、まず北側に対して非常に意識した形で館跡が作られているということができる。すなわち「北の防御施設」としての役割が色濃く出た城館であるといえるのではないだろうか。そのためにⅠ曲輪とⅡ曲輪の間に設けられた「大手虎口」も縦土塁状の遺構を用いながら出入口部分を意識的に狭めたり、また中土塁を設けたりしていることが特徴であると言える。そして防衛的に弱い東側の沢部分などにも、土手状施設を設けて防御を補強していることも特徴としてあげられる。

次に、従来までは、伝法寺館跡は二つの曲輪から構成されているように言われてきたが、どうも南東側にある台地も外郭部分として一部手を加えて、加工している可能性が考えられる。そしてなぜ外郭部分が作られたのかと考えると、それは道路（連絡路）といったものを意識した中で組み立てられていった可能性が指摘できるのではないだろうか。

伝法寺館跡の主郭部分は縄張りからみてⅠ曲輪であることは確実である。そのⅠ曲輪の中でもAとした若干の高まりをもった場所が中心であったと考えられる。残念ながらこの部分は、国道4号線建設工事によってほとんど消滅してしまっているが、その一部分が今回の発掘調査の対象地となっている。伝法寺館跡の縄張りや残存する遺構などから、この館跡の最終年代は16世紀後半のものであるということが考えられる。そして、縦土塁の存在や中土塁の存在などから、南部氏的な築城技術が多分に取り入れられていると言うことができるのではないだろうか。

おわりに

伝法寺館跡については、さまざまな伝承などが残されているが、具体的な様相は見えていなかった。それが国道4号線バイパス建設工事による、記録保存のための考古学の発掘調査によって中世城館の内容がしだいに明らかになっていくものと思われる。

城館の縄張り調査は全体像を把握するうえで非常に有効的ではあるが、具体的な内容を理解するうえで考古学の発掘調査がより有効的であると言える。

そのようなことから、今回の伝法寺館跡の縄張り調査と、考古学的な発掘調査が相互に関連しながら合同の研究が深まっていくことは非常に意義深いものと考えている。

参 考 資 料

青森県教育委員会	1982年	『青森県の中世城館』
〃	1995年	『洞内城跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第196集
青森県文化財保護協会	1965年	『新選陸奥国誌』 みちのく双書
沼館愛三	1971年	『南部諸城の研究』
新人物往來者社	1980年	『日本城郭大系2—青森・岩手・秋田—』

第5章 まとめ

本館跡は、第2章および前章の記述のとおり、大きく二つの郭で構成されている。調査区は、東側の津村館跡とされる郭のほぼ中央部にあたり、最大幅約10m、館跡の北端斜面から約80m程の長さの狭長地が対象である。本調査で検出された遺構は、郭内を区画したと思われる段のほか、図上復元した掘立柱建物跡3棟と柱穴と考えられる小穴が213個、焼土22箇所、竪穴建物跡16棟、土坑34基、竪穴住居跡2軒、溝跡1条である。これらは、多数が重複し調査区内に密に検出されている。時期的には、縄文時代から近世までと多時期のものが混在しているが、大半の遺構は、出土遺物から15世紀から16世紀頃の館機能時のものであると判断している。館跡全体の規模に比べ小範囲の調査であり、制約される点もあり詳細に不明であるが、以下に調査の成果をまとめる。

中世以前の景観

調査では、館機能時以前の縄文時代に比定される溝状土坑3基、平安時代に比定される竪穴住居跡2軒と溝跡が検出されている。このうち、溝状土坑、第2号竪穴住居跡と溝跡は調査区北側縁辺部に位置し、竪穴住居跡と溝跡は斜面に築かれている。このことから、館構築以前の本来の地形は現況の地形よりも北側に迫り出しており、館造成時に大規模な地形変化が行われていたことは明らかである。

溝状土坑の検出から、縄文時代には隣接する平窟(1)遺跡と平窟(2)遺跡と関連して、沢地を挟む本丘陵地域一帯が広く狩猟域であったものと判断される。

平安時代には、竪穴住居跡の検出と出土土師器の点数から、集落を構成していた可能性がある。溝跡には、竪穴住居跡のカマド先端が重複しており、竪穴住居跡構築以前に廃絶していたものと判断され、規模や機能については不明であり断言できないが、しっかりとした掘り込みから、単に排水の目的だけのものではないものと思われる。推測ではあるが、機能的に区画も意図していたものとするれば、既に平安期に、本丘陵上に館の形態をとっていた集落が存在し、調査区外に多数の住居跡が展開している可能性も考えられる。

中世の館機能時の景観

第一にあげられることは、調査区ほぼ中央につくられた段により館内部が区画されている事である。この段差は、地形的に明らかに切り落として造られており、この段を境に南側の上段の平場と北側の下段の平場に分けられる。上段の平場は、表土直下に基盤の八戸浮石流凝灰岩面が平坦に見られることから、本来の丘陵地形を大規模に造成していることは明らかである。本調査区内では、この削土を用いて斜面部を拡幅しているような状態は見られず、顕著な土塁もないことから削土の処理が問題となる。調査区北側の水田のある沢地に設定したトレンチの土層中に基盤層の土が見られたことから、沢地に排出された可能性が強いものと考えている。

第二に、館機能時期に大きく二時期の画期があることである。この古期と新期とした画期では、館の立地する丘陵および館内部を大きく改変していることと、館を構成する建物などの構造物に明らかに違いがあり、配置などから館そのものの使われ方にも大きな違いが認められることである。

しかし、この古期と新期の遺構を把握できるのは、調査区北側の限られた範囲だけで、上段の平場では両期の遺構が混在している。上段の平場で検出された遺構の種類は、基本的に下段の平場のものと同じである。制約された調査区で断定は難しいが、竪穴建物跡と掘立柱建物跡の各柱穴の規模を比

較して見ると、やや大型である感じを受ける。

下段の平場では、土層で古期面と新时期面を確認されたほか遺構に違いが見られる。古期には、前述の平安時代の竪穴住居跡を壊し竪穴建物跡を構築しており、竪穴建物跡の重複から、頻繁に作り替えが行われていたことが判る。この種の遺構は、中世の遺跡では一般的なもので、その機能などについては浪岡城跡報告書Xや内真部(4)遺跡報告書などで述べられているとおりである。また、配置的にも浪岡城跡や根城跡に見られるように、館の縁辺部に構築される傾向にあり、館の構成上で強い規範性があったものと考えられる。本館跡のものはすべて一気に埋め戻されており、埋土に混在する遺物からは16世紀末までつくられていたと考えられるが、下限については時期決定できる遺物がなく定かではなく、前章での伝承のとおり13世紀代に館として機能していたかは不明である。

新时期面では、竪穴建物跡を埋め戻し新たに平場をつくり、掘立柱建物跡を構築している。この新时期面の土は、黒色土を主体とする盛土で、土の出所が問題となる。上段の平場の上位層を用いたものであるとすれば、本館の形状が確立された時期は新时期での画期時と考えることもできるが、断言はできない。新时期面の掘立柱建物跡(小穴)は、一見して多数の焼土跡を囲むようにあることから、焼土跡は掘立柱建物跡に付随するものと考えている。本調査では、上段の平場も含め小穴(柱穴)について詳細に捉えられなかったが、図示した以上の棟数ないしは、作り替えがあった可能性は高い。以上のように、古期と新时期では構造物の構築場所に明確な相違が確認される。古期には、館縁辺に作業場ないし倉庫と考えられる竪穴建物跡が並び、内部には掘立柱建物跡がつくられる。新时期には、掘立柱建物跡を中心とした構造となるが、上段の平場の構築物が規模的に大きく、前章での記述のように、本館跡のなかでは重要な区域を占めるものと思われる。おそらく上段の平場は、館主を中心とした上位階級層の居住域であったものと推測される。

館の廃絶についても伝承の域をでない。調査区内の土と混入する遺物から、近世ないしは現代にも盛土されており、廃絶後も土地利用されている。

出土遺物から

中世の館機能時に比定される遺物は、陶磁器類で約100点程、鉄製品と銭貨で約100点程が出土している。陶磁器類は年代的に言及できなかったが、15世紀代は染付、青磁、白磁などの船載磁器を主体にし、16世紀と17世紀代は瀬戸美濃系陶磁器を主体にしている。器種的には大半が、皿と碗の生活用具で他に香炉の破片が1点ある。また、限定された調査区でもあるが、陶磁器類の出土数に比べ瓦質土器が出土していない点で特異である。陶磁器類は新时期の盛土からの出土が多く、いずれも細片であり、特に染付、青磁、白磁などは焼け焦げた物が多く施釉が溶け剥落しているものが多い。遺物の状態から、15世紀代には火災に伴い館に何らかの変化があったものと推察される。

鉄製品では、生活用具、武器、建築用具と器種も多様である。陶磁器と同様に新时期の盛土のほか竪穴建物跡の埋土からの出土が多く、時期的にも混在している。時期的な区分は不明なものの、生活用具や建築用具からは活発な様相が窺われる。また、武器イコール戦時の備えないし戦時の痕跡では短絡すぎるが、九戸の乱に係わる伝承をもつ館跡も多く、奥州街道沿いにあり七戸城との位置関係からも史実上の戦に結び付く可能性もある。

このほかに、水滴や硯、天目茶碗片や茶臼片の出土から、周辺地域を納める有力な上位階級者の居館であった可能性が極めて強い。

(小田川)

引用・参考文献

著者名	年度	著書名
青森県教育委員会	1976	『黒石市牡丹平南・浅瀬石遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第26集
青森県教育委員会	1980	『長七谷地貝塚』青森県埋蔵文化財調査報告書第57集
青森県教育委員会	1983	『浜通遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第80集
青森県教育委員会	1983	『鶴窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第76集
青森県教育委員会	1988	『小田内沼(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第107集
青森県教育委員会	1991	『中野平遺跡—古代編』青森県埋蔵文化財調査報告書第134集
青森県教育委員会	1991	『向山(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第134集
青森県教育委員会	1993	『野脇遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第149集
青森県教育委員会	1993	『内真部(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第158集
青森県教育委員会	1993	『富ノ沢(2)遺跡VI発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第147集
青森県教育委員会	1995	『槻ノ木(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第169集
青森県教育委員会	1995	『上蛇沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書177集
青森県立郷土館	1976	『小田野沢 下田代納屋B遺跡発掘調査報告書』
八戸市教育委員会	1987	『福浅屋新田遺跡(2)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第19集
八戸市教育委員会	1988	『田面木平遺跡(1)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集
八戸市教育委員会	1989	『赤柳堂遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第33集
八戸市教育委員会	1993	『根城一本丸の発掘調査』八戸市埋蔵文化財調査報告書第54集
八戸市教育委員会	1997	『酒美平遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第73集
浪岡町教育委員会	1985	『浪岡城跡VII』昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書
浪岡町教育委員会	1989	『浪岡城跡X』昭和61・62年度浪岡城跡発掘調査報告書
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1987	『大堤Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第119集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1995	『水古VI遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第219集
国立歴史民俗博物館	1994	『日本出土の貿易陶磁：東日本編1』国立歴史民俗博物館調査報告書5
石井通也	1992	『北の中世』中世の里シンポジウム実行委員会編
石岡憲雄	1991	『埼玉考古学論集—「Tピット」について(再論)』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井上喜久男	1990	『尾張陶磁(1)—近世初期の瀬戸物生産』『愛知県陶磁資料館研究紀要9』
上田秀夫	1982	『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
宇部則保	1989	『青森県における7・8世紀の土師器』『北海道考古学第25輯』
大野 亨	1990	『根城本丸出土の土師器について』『八戸市博物館研究紀要第6号』
大橋康二	1989	『肥前陶磁』考古学ライブラリー(ニューサイエンス社)
小笠原善範・小保内裕之	1995	『西長根遺跡』『八戸市内遺跡発掘調査報告書7』八戸市埋蔵文化財報告書第61集
小野正敏	1982	『15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代』『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
金沢 陽	1984	『17～18世紀の陶磁の東西交流とその時代』『陶磁の東西交流』出光美術館
桜井清彦	1958	『東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題』『館址』
田村壮一	1987	『論し穴状遺構の形態と時期について』『紀要VI』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
永井久美男	1996	『日本出土鉄総覧』兵庫県埋蔵文化財調査会
日本貨幣商協同組合	1996	『日本貨幣型録』
福地村教育委員会	1997	『苔米地館遺跡』
藤澤良祐	1986	『瀬戸大窯発掘調査報告』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』
水町和三郎	1986	『古唐津』出光美術館
森田 淳	1994	『松ヶ崎遺跡』『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』八戸市埋蔵文化財報告書第60集
村田 勉	1982	『14～16世紀の分類と編年』『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
劉 新園・長谷部素爾	1955	『皇帝の磁器』大阪市立東洋陶磁美術館

大和田遺跡

写真図版

- 写真1 ①遺跡遺景（南から） ②作業状況（北から） ③調査区全景から（北から）
- 写真2 ①調査区全景（東から） ②基本層序（東側境界面）
- 写真3 ①第1号竪穴住居跡土層C-D（南から） ②土層A-B（西から） ③完掘（南から）
- 写真4 ①第1号竪穴住居跡炭化材出土状況（西から） ②住居跡東側炭化材（東から）
③住居跡東側炭化材（西から） ④住居跡東側炭化材（南から） ⑤カマドおよび遺物出土状況（南から）
⑥カマドおよび遺物出土状況（南から） ⑦カマド袖断面（南から）
- 写真5 ①第2号竪穴住居跡内火山灰（西から） ②土層C-D（南から） ③土層A-B（東から）
- 写真6 ①第2号竪穴住居跡完掘（東から） ②床断割り状況（東から） ③遺物出土状況（東から）
- 写真7 ①第2号竪穴住居跡遺物出土状況（南から） ②カマド検出（南から） ③カマド精査（南から）
④カマド断割り（南から） ⑤床面焼土及び遺物（東から） ⑥床面焼土断割り（南から）
- 写真8 ①第3号竪穴住居跡検出（西から） ②火山灰検出状況（東から） ③土層断面（西から）
- 写真9 ①第3号竪穴住居跡遺物出土状況（西から） ②完掘（南から） ③床断割り状況（西から）
- 写真10 ①第3号竪穴住居跡カマド（南から） ②カマド断割り（南から） ③煙道土層断面（西から）
④煙出孔土層断面（西から） ⑤遺物出土状況（北西隅） ⑥遺物出土状況（南東隅）
- 写真11 ①第4号竪穴住居跡内火山灰（西から） ②土層A-B（南から） ③完掘（西から）
- 写真12 ①第4号竪穴住居跡完掘（西から） ②カマド（南から） ③カマド断割り（南から）
④カマド土層（西から） ⑤土師器出土状況（南から） ⑥亭引金出土状況（南から）
- 写真13 ①第1号周溝完掘（西から） ②第1号土坑土層（南から） ③第2号土坑完掘（西から）
④第3号土坑完掘（北から） ⑤第4号土坑完掘（西から） ⑥第5号土坑土層（南から）
⑦第8号土坑完掘（南から）
- 写真14 ①第Ⅲ層遺物出土状況 ②第Ⅳ層遺物出土状況 ③第Ⅴ層遺物出土状況 ④第Ⅴ層遺物出土状況
⑤第Ⅴ層遺物出土状況 ⑥第Ⅴ層遺物出土状況
- 写真15 第1号竪穴住居跡出土遺物（5-1～5-7）・第2号竪穴住居跡出土遺物（9-1～10-7）
- 写真16 第3号竪穴住居跡出土遺物（13-1～14-5）・第4号竪穴住居跡出土遺物（17-1～17-2）
- 写真17 遺構外出土遺物・石器



①遺跡遠景（南から）
②作業状況（北から）
③調査区全景（北から）



①調査区全景（東から）
②基本層序（東側境界面）